

平城京左京三条一坊十四坪
発掘調査報告

奈良国立文化財研究所

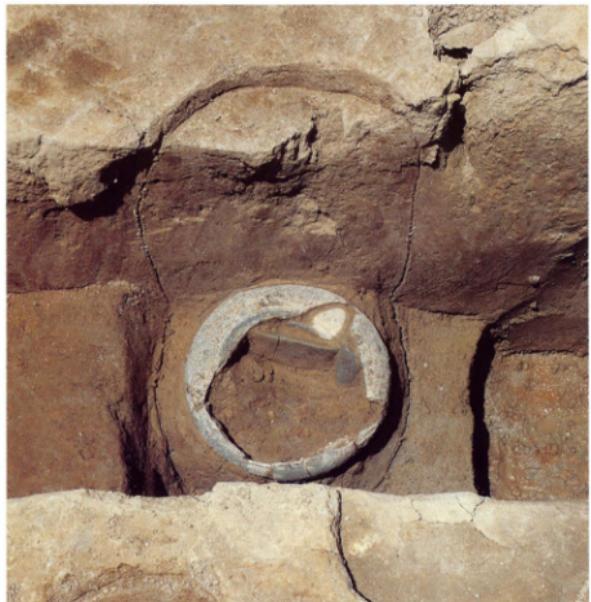
平城京左京三条一坊十四坪

発掘調査報告

奈良国立文化財研究所



胞衣壺・刀子・筆管・墨挺



胞衣壺出土状態 東から

はじめに

奈良国立文化財研究所が平城宮跡の継続的な発掘調査を実施し始めたのは1959年、それ以降、さまざまの新しい歴史情報をもたらす成果を得ることができた。この間、発掘調査は、平城宮の中だけにとどまらず、平城京の宮域外の地域にもおよんでいった。

平城宮域内における発掘調査は、一定の計画に則って実施してきた。これに対して、平城京の宮域外の地域、奈良の都の街路と街区が広がる地域の発掘調査は、その多くが進行する各種の開発行為に対応するいわゆる緊急調査であり、おもに奈良市や奈良県が実施し、当研究所もその一部を分担してきている。

今回報告する発掘調査も、また、これまでの平城京城内の発掘調査と同じような緊急調査であり、賃貸住宅を建設する民間の開発行為に対応して、工事の着工前にその予定地で実施したものである。その場所は、平城宮にごく近く、京のかつての街区呼称によると、左京三条一坊十四坪にあたり、往時は大規模な邸宅か、あるいは役所関係の施設があった、と推定できるところである。この三条一坊では、過去25年間以上のあいだに40回に近い大小の規模の発掘調査があった。しかし、十四坪で発掘調査を実施したのは2度、今回の調査もわずかに620m²ほどの小範囲。これだけでは、この地点の往時の姿を知るのには十分ではないが、1967年に実施したさきの調査結果をあわせると、この十四坪には園池を備えた大邸宅があった可能性が指摘できるようになっている。

平城京城の発掘調査には、今回報告するような小規模なものが少なくないが、その積み重ねから、かつての実態がかいまみてくる。このような調査は多方面のご協力を得て可能になっている。その状況はこの報告書からも読みとっていただけのであろう。このような状況にある平城京城における発掘調査に対して、今後もご支援とご指導、ご鞭撻をたまわれば幸いである。

1995年3月

奈良国立文化財研究所長
田中 琢

目 次

I	序 章	
1	調査の経過と概要	1
2	遺跡の環境	2
II	遺 跡	
1	遺跡の概観	10
2	遺 構	10
III	遺 物	
1	瓦 塼	14
2	土 器	22
3	金属製品・土製品他	24
IV	土器埋納遺構	
1	出土状況	25
2	出土遺物	25
3	平城京左京三条一坊十四坪から出土した 土器に残存する脂肪の分析	27
V	考 察	
1	条坊の復元	37
2	左京三条一坊十四坪の遺構変遷	42
3	結 語	48

図 版

- 口 絵 胞衣壺・刀子・筆管・墨挺
胞衣壺出土状態 東から
- P L. 1 第249次調査 1 発掘区全景 北から
2 発掘区中央 西から
- P L. 2 第249次調査 1 発掘区北端 南西から
2 発掘区南端 北西から
- P L. 3 第249次調査 1 挖立柱建物 SB5631 北から
2 挖立柱建物 SB5640・掘立柱壠 SA5641 北から
- P L. 4 第249次調査 1 掘立柱建物 SB5632 北から
2 南拡張区 北東から
3 東拡張区 北から
- P L. 5 第249次調査 1 土器埋納道構 SX5670 北から
2 挖立柱建物 SB5630柱抜取り穴土師器出土状況 北西から
3 挖立柱建物 SB5630北妻の柱根 南東から
4 掘立柱建物 SB5632東妻の柱根と礎板 東から
- P L. 6 軒瓦の組合せ・軒丸瓦
- P L. 7 軒丸瓦
- P L. 8 軒平瓦
- P L. 9 丸瓦・平瓦・埠・箇插瓦
- P L. 10 上器・陶硯
- P L. 11 金属製品・土製品等
- P L. 12 第46次調査 1 発掘区北半 南から
2 発掘区南半 南から
- P L. 13 第46次調査 1 発掘区北端 南東から
2 門 SB250・築地壠 SA201 南西から
- P L. 14 第46次調査 1 総柱高床倉庫 SB260 西から
2 池 SG210 北西から

捕 図

- Fig. 1 左京三条一坊付近空中写真
(左: 1962年 右: 1994年)
- Fig. 2 左京三条一坊の発掘調査位置
- Fig. 3 第46次発掘調査北半調査風景 (北から)
- Fig. 4 軒瓦拓影
- Fig. 5 軒平瓦6691Bの泡傷進行
- Fig. 6 軒瓦6091A-6691B
- Fig. 7 瓦埠実測図・拓影
- Fig. 8 料平瓦6717A+B
- Fig. 9 土器実測図
- Fig. 10 瓦埠実測図
- Fig. 11 鉄釘実測図
- Fig. 12 胎衣壺出土状態
- Fig. 13 胎衣壺・埋納品実測図
- Fig. 14 土壤試料採取地点
- Fig. 15 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成
- Fig. 16 試料中に残存する脂肪のステロール組成
- Fig. 17 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図
- Fig. 18 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関
- Fig. 19 試料中に残存する糖脂質GM₁、フォルスマンの酵素抗体反応
- Fig. 20 試料中に残存する糖脂質アシアロGM₁、アシアロGM₁の酵素抗体反応
- Fig. 21 試料中に残存する糖脂質血液A型物質、B型物質の酵素抗体反応
- Fig. 22 左京二条一坊十四坪四周の条坊復元
- Fig. 23 I a 期の遺構
- Fig. 24 I b 期の遺構
- Fig. 25 II a 期の遺構
- Fig. 26 II b 期の遺構
- Fig. 27 III 期の遺構
- Fig. 28 IV 期の遺構

付 図

第46・249次発掘調査遺構平面図

表

- Tab. 1 調査経過の概要
- Tab. 2 第46次発掘調査 建築遺構一覧
- Tab. 3 軒瓦計測表
- Tab. 4 乾元大寶の螢光X線分析
- Tab. 5 上壤試料の残存脂肪抽出量
- Tab. 6 試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合
- Tab. 7 哺乳動物赤血球の主要糖脂質の化学構造
- Tab. 8 ヒト赤血球膜の糖脂質群
- Tab. 9 上器に残存する血液型糖脂質群の酵素抗体反応による認定
- Tab. 10 関連条坊標一覧表
- Tab. 11 条坊遺構の閏数化
- Tab. 12 条坊計画線の方程式の推定

例　　言

- 1 本書は奈良市三条人路2丁目542-1、543-3、546-2における発掘調査報告書である。
- 2 調査は、奈良県教育委員会の依頼により、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部（部長町田 章）が実施した。調査期間は1994年4月4日から5月23日で、調査面積は620m²である。
- 3 調査には、小林謙一、玉田芳英、小沢毅、浅川滋男、渡辺晃宏が参加し、岩崎大介、福田美穂の協力を得た。調査にあたっては、株式会社トヨー、および奈良県教育委員会事務局の協力を得た。
- 4 本調査地に関連して、当研究所が第46次調査（調査期間：1968年12月13日～1969年4月3日、調査面積：2,290m²）を実施しており、本書には、その成果の一部も含めた。
- 5 本書の作成は、当調査部部長町田章の指導のもとに調査員全員があたり、全体の討議を経て以下のように分担して執筆した。
I-1、II-1、III-3A・B、IV-2B、V-3：小林、I-2：渡辺、II-2、V-2：浅川、
III-1、V-1：小沢、III-2、IV-1・2A：玉田、III-3C：村上 隆、IV-3：中野益男（帝
広畜産大学）、長田正宏、中野寛子、青原利佳
- 6 胞衣壺の化学分析は、株式会社ズコーシャに依頼し、成果を得た。
- 7 遺構・遺物の写真は、当調査部伊幹雄、牛嶋茂が担当し、杉本和樹、森本佐由理の協力があつた。また、空中写真（Fig. 1右）は、奈良市より提供を受けた。
- 8 本書の編集は小林が担当した。

I 序 章

1 調査の経過と概要

調査地は、平城京左京三条坊十四坪の東北部にあたり、現在は、奈良市街をそれぞれ東西と南北に貫く幹線道路である国道368号線（大宮通り）と国道24号線が交叉する地の南西に接する交通至便の地にあたる。加えて、市役所が移転してきて以降、周辺においては、大規模店舗をはじめとする各種の店舗・事務所ビルなどが建設され、急速に都市化が進んできた一画である。本書にその成果の一部をとりあげた第46次調査は、調査地の西方、同じ十四坪の西辺において、1967年12月から1968年4月にかけて、(株)NTT、当時は日本電信電話公社の社屋新設にともない実施したものであるが、当時の写真を見れば、大宮通りをはじめとする周辺の変貌ぶりは、一目瞭然である。

今回の調査地は、かつて工場が操業していたのであるが、(株)トヨーにより、その跡地（敷地面積1,549m²）に鉄筋6階建ての賃貸住宅（建築面積683m²）の建設が計画された。発掘届に基づき、奈良県・奈良市・奈良国立文化財研究所で協議の結果、奈良県教育委員会の依頼により、奈良国立文化財研究所が調査を実施することとなった。

4月4日に、関係者の立会いのもとに、建設予定地にはば重なる形で東西12.5m、南北46.5mの調査区を設定し、直ちに重機による盛土・旧耕土・床土の除去を開始した。なお、重機による排土の処理については、敷地内に余地がないことと工事施工の関係もあって場外へ搬出した。また、重機排土の過程で、調査区東辺に沿って、かつての工場の基礎が約9m間隔で南北に並び、遺構面下60~70cm前後に及んでいることが明らかになり、その部分については、一部を重機で掘削することにした。6日早朝に残土処理を終えた後、設営・器材搬入、その後、作業員による本格的な発掘調査に取りかかった。天候にも比較的恵まれ、大型連休の前に遺構検出作業、地上写真撮影を終えることができた。その後、平面実測図・上層図を作成するとともに、発掘区南端で検出した柱掘形の性格、および、発掘区東辺の状況を明らかにするために、発掘区の両端と東辺の一部を拡張した。拡張区の写真撮影後、平面実測図を作成し、5月23日に調査を終了した。

調査は坪の東北部であったが、庭付の掘立柱建物、掘立柱塀などを検出し、4時期にわたる遺構変遷が明らかになるとともに、胞衣壺を納めた土器埋納坑を検出するなどの成果をあげることができた。なお、調査経過の概要はTab.1を参照されたい。

Tab.1 調査経過の概要

4月4日	発掘区設定。重機による排土開始。	5月10日	土層図の作成（5月17日まで）。
4月6日	発掘現場設営・器材搬入。	5月12日	南端及び東辺の発掘区拡張。
	遺構検出作業開始。	5月13日	拡張区の遺構検出作業開始。
4月7日	乾元寶出土。	5月17日	東拡張区の地上写真撮影。
4月13日	遺構の掘り下げ開始。	5月18日	南拡張区の地上写真撮影。
4月14日	SB5630柱抜取り穴から上部器出土。		拡張区の平面実測（5月19日まで）。
4月26日	地上写真撮影。	5月20日	SK5645の覆り下げ。
4月27日	平面実測（5月6日まで）。		SX5670から胞衣壺出土。
5月9日	柱穴の断ち刺り開始。	5月23日	器材撤収。
	SB5632東妻を柱根と礎盤を確認。		

2 遺跡の環境

調査地の所在する平城京左京三条一坊は、北を二条大路、西を朱雀大路、東を小字門から南に延びる東一坊大路、南を三条大路によって開まれた地域である。政治の中核として機能した東区大極殿・朝堂院地区の南面の門である壬生門の前面に広がり、同門から南に延びる東一坊坊間大路が坊の中央を南下する。位置的には平城宮南面の一等地といってよい。東側の左京三条二坊は、一坪以上を占める貴族の邸宅の所在地として知られており、三坪、四坪、六坪(宮跡庭園)、九坪、十五坪は一坪ないしそれ以上の占地の宅地と考えられており、また一・二・七・八坪は奈良時代前半には左大臣長屋王と妻吉備内親王の邸宅「北宮」として、四坪を占める広大な邸宅が営まれていたことが明らかになっている⁽¹⁾。これに対し三条一坊は、位置関係でいえば平城宮とより密接な関係にあり、大規模な邸宅が所在しても不思議のない環境にある。今回の調査地のある十四坪は三条一坊東辺の北から三つめの坪で、東一坊大路を挟んで三条二坊に向かい合い、北東斜向かいには「北宮」が位置する。今回の第249次調査地は十四坪の北東隅にあたる。

一方、平城京左京三条一坊に関する文献史料はきわめて乏しく、天平勝宝八歳(756)8月22日付「東大寺三綱牒」(いわゆる東大寺奴婢帳)『大日本古文書』家わけ第18、東大寺文書之7、p.56。『同』編年文書卷4、pp.181~182)に二人の戸主大初位下阿刀宿祢田主、山辺少孝子がみえ、天平勝宝七歳10月25日の恩勅により放賊從良された鮑女、針間女を、それぞれ阿刀鮑女、山辺針間女として付記されているのを知るのみである。従って、この地域の性格の解明には、発掘調査の成果の集積が何よりも必要となる。

左京三条一坊の故地は、1960年代前半までは北部中央に所在する北新の集落と、その西側の北新大池・小池を除くとほとんどが水田として利用されていた。同じ左京三条でも東隣の三条二坊やそれ以東に比べるとまだいくらか開発を免れており、現在でも水田が残されている。しかし、通称大宮通りの拡幅と奈良市役所の移転以後、急速に開発の波が押し寄せてきており、開発に伴う緊急調査の事例も増加している。



Fig. 1 左京三条一坊付近空中写真(左:1962年 右:1994年)

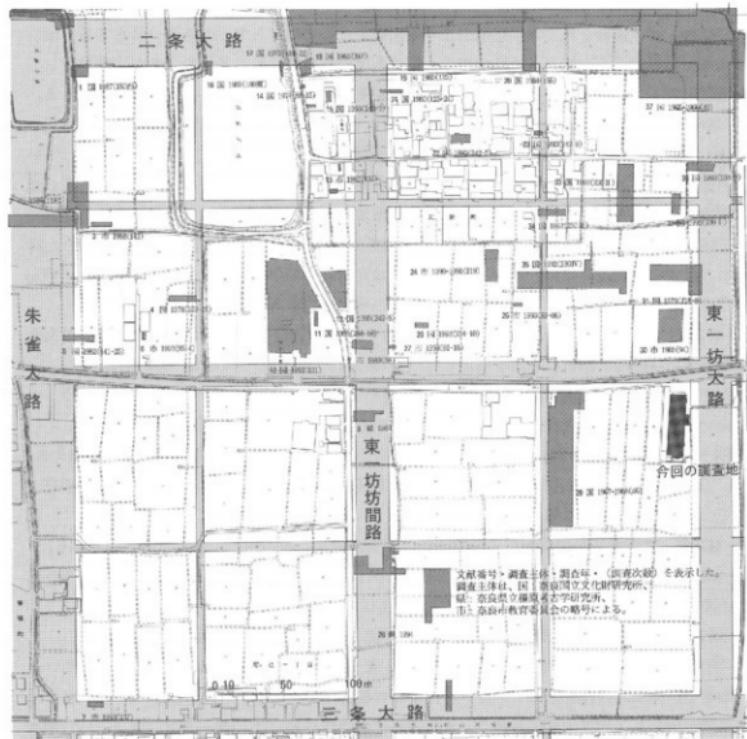


Fig. 2 左京三条一坊の発掘調査位置

文 献（番号は図中の番号に対応）

- 1 奈良国立文化財研究所『昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』（以下、「平城概報」と略称）
- 2 奈良市教育委員会『昭和61年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』（以下、「市概要」と略称）
- 3 「昭和62年度市概要」
- 4 「昭和62年度平城概報」
- 5 奈良国立文化財研究所『平城京朱雀大路発掘調査報告書 1982』
- 6・7 「平成5年度市概要」
- 8 奈良県立橿原考古学研究所『平城京東一坊訪問路発掘調査概報』（「奈良県遺跡調査概報 1983年度（第一分冊）」）
- 9 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』
- 10 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』
- 11 「1992年度平城概報」
- 12 「1993年度平城概報」
- 13 「昭和62年度市概要」
- 14 未報告
- 15 「1993年度平城概報」
- 16 「昭和61年度平城概報」
- 17 「昭和54年度平城概報」
- 18 「昭和60年度平城概報」
- 19 「昭和55年度平城概報」
- 20 「昭和59年度平城概報」
- 21 「昭和55年度平城概報」
- 22・23 「1993年度平城概報」
- 24 「平成2年度市概要」
- 25 「平成4年度市概要」
- 26 「1992年度平城概報」
- 27 「平成4年度市概要」
- 28 未報告
- 29 「奈良国立文化財研究所年報 1968」（以下、「奈文研年報」と略称）
- 30 「昭和60年度市概要」
- 31 「昭和54年度平城概報」
- 32・35 「1992年度平城概報」
- 36 「1992年度平城概報」
- 37 「奈文研年報 1966」

ここでは、近年蓄積されてきた発掘調査の成果を主たる素材として、調査地の所在する平城京左京三条一坊の状況を、坪ごとに坪の四周、坪の内部の順で概観し、各坪の、また坊全体としての土地利用のあり方を考えてみたい。なお、紹介する遺構は奈良時代のものに限ることとする。

三条一坊一坪 北側では二条人路南側溝を検出しているが、北面の区画施設は確認されていない(調査1)。西側では朱雀大路東側溝(調査1・2)と西面築地の添柱穴、足場穴(調査2)を確認している。南側では二坪との間を東西に走る三条条間北小路とその南北両側溝を検出している。この側溝は西流して朱雀人路東側溝に合流するが、西面築地を暗渠で抜けた痕跡はなく、西面築地は一坪と二坪の間で途切れていたと考えられている(調査2)。一坪と二坪が別個に利用されていた時期があったことは間違いない。なお、坪内の状況は発掘調査の事例がなくわかっていない。平安京では、左京三条一坊一・二・七・八坪は大学寮の所在地である。

三条一坊二坪 西側では朱雀大路東側溝と西面築地を確認し(調査5)、東側では七坪との間を南北に走る東一坊坊間西小路の西側溝を検出している(調査4)。北側については一坪の項参照。

坪内では、西辺北部で礎石据え付け痕跡2基と柱穴(調査3)、西辺南部で土坑群(調査5)、東辺中央で小規模ながら柱穴数基(調査4)を検出しており、南部でも奈良時代の柱穴を確認している(調査6)。周辺部のみの調査ではあるが、ある程度まとまりをもった土地利用の状況が窺える。また、二坪と七坪が別個に利用されていた時期があったことも確実である。平安京では大学寮の一郭で、その南西隅の坪に相当する。

三条一坊三坪 発掘調査の事例がなく実態不明。平安京では一町占地で左京職の所在地である。

三条一坊四坪 坪南西隅で自然流路と杭列を検出しているが、区画施設などは未確認、坪内の状況も不明である(調査7)。平安京では契学院が所在地とした。

三条一坊五坪 発掘調査の事例がなく実態不明。平安京では勸学院の所在地である。

三条一坊六坪 東側では十・坪との間を南北に通る東一坊坊間人路とその西側溝を検出しているが、東面の区画施設は確認されていない。西側溝は幅3.8m深さ0.8mで、出土瓦には天平末年以降の平城宮所用瓦と同様のものが多く、大型圓脚円筒瓦や縁軸瓦などの優品が出土している(調査8)。坪内の利用状況は不明であるが、遺物からみて平城宮に関連したある程度格式の高い施設が置かれた可能性がある。平安京では弘文院の所在地である。

三条一坊七坪 東側では十坪との間を南北に通る東一坊坊間人路とその西側溝、及び東面築地の添柱穴を検出している。西側溝は幅6m深さ1.4mと大規模である(調査9)。

坪内でも3次にわたる調査が行なわれており、利用状況が判明している。坪の中央部分を調査した奈文研第231次調査(調査10)では、工場用地として利用されていた時期の破壊が著しかったものの、掘立柱建物13棟、土器廃棄のための土坑6基、井戸5基、道路2条、掘立柱塀1条などを検出した。遺構密度は薄く、また建て替えも少ない。時期的には奈良時代の前半の建物は1棟のみで、他は奈良時代後半の2つの時期に分けられる。2時期とも正殿と脇殿からなる官衙的な建物構成をとる。一方、坪南辺には小規模な建物が配され、「厨」と記された墨書き土器が出土したことなどとも併せて厨の空間と考えられている。調査区西辺には南北に延びる坪内道路があり、坪内を道路によって区画した利用状況が窺われる。初めの時期の正殿SB5758の前面で行なわれた奈文研第234-16次調査(調査11)では、この正殿の前面には建物がなく、広場として機能していたことが確認されている。

一方、坪東辺の奈文研第242-8次調査(調査12)では、掘立柱建物5棟、掘立柱塀4条、井戸1基などは確認されている。建物の密度は薄くまた規模も小規模で、雜舍群と考えられる。時期的にも奈良時代後半を土体とし、調査10と共にした状況を呈している。また、調査10で一部を検出した正殿SB5758は、調査12の範囲までは延びないことが確認され、その規模が5間×3間であることが判明した。なお、調査10の「厨」「米」「飯」「加」「田」など、調査12の「在」「本」「山」「田」など、墨書き器の出土が多いのも七坪の特徴の一つである。

このように3次にわたる発掘調査によって明らかになった状況からみると、七坪は平城宮南面の一等地であるにもかかわらず、上級貴族の邸宅とは見なしがたく、中・下級貴族の邸宅または宮外官衙と考えられる。平安京では左京三条一坊…二・七・八坪は大学寮の所在地であり、調査10の報告書では、直接的な証拠はないものの、「入学寮図」によって知られる建物配置との類似や文献、及び木簡などの出土文字資料から、平城京においても左京三条一坊七坪が大学寮の一郭であった蓋然性が高いと結論付けている。

三条一坊八坪 九坪とともに壬生門の正面に位置する坪である。北側では、二条大路南側溝を3カ所で確認しており(調査16~18)、このうち1カ所では北面築地を検出している(調査18)。

一方、坪内では北部(調査14・15)と南東部(調査13)で小規模な調査が計3回行なわれている。このうち調査13南区では柱穴を検出している。また、調査14北区では柱穴1基を、また調査15では塀もしくは建物の柱穴列を確認している。なお、調査18では、從米羅城門地域で出土が目立っていた軒平瓦6711Aがまとまって出土しているが、この瓦は七坪でも出土しており(調査10)、両坪の関係を考える上で注目される。この坪も平安京においては大学寮の一郭である。

三条一坊九坪 北側では二条大路南側溝を2カ所で検出している(調査19・20)。このうち調査20では北面築地の寄柱痕跡を確認している。西側では八坪との間の東一坊坊間大路位置が調査されているが、造構は確認されていない(調査21)。東側では東隣の十六坪との間の東一坊坊間東小路の西側溝を検出している(調査23)。

坪内では坪の東西中軸線にかかる中央部で小規模な調査が実施されている(調査22)が、小規模な建物と自然流路などを検出したのみである。なお、平安京では左京三条一坊九~十六の八坪には、神泉苑⁽³⁾が所在したが、後述のように十坪と十五坪、十四坪と十五坪が一体として利用されていた形跡はなく、また性格的にも十二坪、十四坪は貴族の邸宅の敷地と考えられているので、ここに八坪占地の苑池を伴う施設が存在した可能性はない。

三条一坊十坪 東側では、東隣の十五坪との間を南北に走る東一坊坊間東小路を東西両側溝とともに検出している(調査34・35)。東面築地も確認されており、これには掘立柱の棟門がとりつく(調査35)。従って、十坪と十五坪とは別個に利用されていたことが判明する。

坪内では5次にわたる調査が行なわれている。まず坪中央部では、掘立柱建物6棟、柱列1条などを検出しており、4時期の重複がある(調査24)。その東の坪東端で検出された井戸の抜取穴からは5点の木簡が出土している⁽³⁾(調査35)。このうち1点には、「□枝宅車二両」とある。「宅」の表記からみて個人の邸宅に関わる木簡であることは確実で、十坪の性格を考える上で重要な資料となるが、□枝宅が十坪に置かれた施設を指すのか、またこの施設と木簡のやりとりを行なった施設を指すのかは定かでなく、後述のようにこの資料により宅地と断定するのは問題が残る。次に、この調査Ⅹの南側の調査でも奈良時代の土坑・溝などを検出している(調査25)。坪南西部

では、奈良時代の蛇行する自然流路と井戸を検出したが、この井戸から庭園を意味する「西鶴」「鶴」と記された削屑が出土した⁽⁴⁾のが注目される(調査26)。さらに坪南西隅でも柱穴を確認している(調査27)。

三条一坊十一坪 坪内の北西隅における小規模な未報告調査事例があるだけで、坪内の実態や性格は明らかでない。

三条一坊十二坪 西側の東一坊坊間大路から坪の西1/3にかけて調査されている(調査28)。まず西側で東一坊坊間人路とその東西両側溝を検出している。路面幅は80尺に近い。西側溝は幅7m深さ2mの大規模なもので、馬の骨が大量に出土し、横櫛・斎串・土馬など祭祀遺物も目立つ。東側溝は規模が小さい。一方南側では三条大路北側溝を検出した。坪内は通常の京内の宅地と同様の状況を呈し、5時期の変遷がある。当初は1坪以上の占地であったが、3時期め以降分割され、奈良末にかけてさらに細分化が進む。

三条一坊十三坪 発掘調査の事例がなく実態は不明。

三条一坊十四坪 今回の調査地の位置する坪である。1967・1968年に坪西辺で実施された奈文研第46次調査(調査29)によって利用状況の一部が判明している。この調査については、これまで『奈良国立文化財研究所年報 1968』で概略が紹介されているだけであるので、ここでは主として同調査終了報告に基づいて成果を記述する。なお、詳細は本書V-2を参照されたい。

第46次調査で検出した遺構は、掘立柱建物24棟、坪西面の築地塀と、これに取り付く掘立柱の棟門1棟、塀5条、池などである。調査区西より東一坊坊間東小路SF400の東端と、同東側溝SD385(幅1.5m)、及び十四坪西面の築地塀SA201(基壇幅約2m)を検出した。これには坪の南端から3/10の位置付近に掘立柱の棟門SB250が開く。棟門の北寄りには東西暗渠が設けられている。



Fig. 3 第46次発掘調査北半調査風景（北から）

坪の内部は小さな庭と小規模な掘立柱建物からなる南部分、倉の並ぶ中央部分、掘立柱建物が集中する北部分に分けられる。造構は中央部分とその周開を除くと人妻密であり、最低3時期の重複がある。坪西辺の南部分には西よりに小石をまばらに配置した中島とそれを囲む池があり、なお南の末発掘地域に延びている。この池をとりまいて小規模な掘立柱建物8棟が建て替えられている。建物は東西棟のものが多い。南部分と中央部分との境には東西方向の塀が2度にわたり設けられている。

坪西辺中央部分には3間×3間の同規模の掘立柱の倉庫2棟SB260・SB280が南北10m離れて並ぶ。直径55cmの柱根が残るものがあり、相当大規模な倉庫であったとみられる。

坪西辺の北部分には、掘立柱建物14棟が建て替えられている。南よりは南北棟建物、北よりは東西棟建物が多い。東西両面庇付き建物もあり、建物規模は南部分より大きなものが多く、南部分とは異なる性格をもつものと考えられる。

このような造構配置からみて、十四坪は1坪またはそれ以上の占地の宅地で、その内部をいくつかの空間に分けて使用していたとみられる。宅地の規模については、調査区南端で検出した池はその北端でありさらに南に延びると考えられること、築地塀に聞く棟門が十四坪西辺中央の位置ではなく南3/10付近であることなどから、十二坪との間には小路がなく2坪一体の占地であった可能性がある。今回の第249次調査の成果も、1坪以上の宅地の一部としてふさわしい。

三条一坊十五坪 今回の調査地の北に位置する坪である。西側では、西隣の十坪との間の東一坊坊間東小路を東西両側溝とともに2カ所で検出しており(調査34・35)、また西面築地も2カ所で検出している(調査34・35)。一方東側では、左京三条二坊との間を限る東一坊大路の西側溝を検出しており、丹波国の尚札や千字文の習書を含む木簡18点が出土している⁽³⁾(調査31)。これに対し北側では、北隣の十六坪との間に三条条間北小路が存在せず、十五・十六両坪が奈良時代を通じて一体として利用されていたことが判明した(調査32~34)。両坪の間には東西中袖線上に礎石建ちの1間の門が聞く築地塀があり、これによって南北2つの区画に分けられていた(調査33)。この築地塀の西端は西面築地に取り付いており、西面築地は十五・十六坪の西側で途切れずに続いている(調査34)。

坪内の状況は5カ所の発掘調査によって確認されている。坪の中心部では、桁行7間梁間4間の七殿、桁行7間梁間2間の前殿、桁行7間梁間不明の後殿という三棟の大型東西棟建物を南北に並べて配し、その左右に桁行3間梁間2間の南北棟建物を対称に置くという平城京内のみならず平城宮内でもこれまでに例をみない建物配置が、掘立柱建物から礎石建物への建て替えを経て奈良時代を通じて続くことが明らかになっている(調査35)。坪の中央北辺でも掘立柱塀2条(調査33)、坪の北西隅でも南北棟掘立柱建物を検出している(調査34)。一方、坪の南東部でも比較的規模の大きな掘立柱建物3棟、井戸2基などを検出している(調査30)。また、その北側でも東西両面庇付き南北棟建物を含む掘立柱建物3棟などを検出している(調査31)。

三条一坊十六坪 十五坪の項で述べたように、この坪は奈良時代を通じて十五坪と一体として利用されていた。北東隅で二条大路南側溝と北面築地、東面築地と東一坊大路西側溝を検出している。北面築地南雨落溝から東面築地を抜けて東一坊大路西側溝を結ぶ暗渠も検出されており、また東一坊大路西側溝からは木簡も出土している⁽⁴⁾(調査37)。東一坊大路西側溝は坪南東部でも検出しており、ここでも木簡が出土している⁽⁵⁾が、坪の閉塞施設は西雨落溝を確認したにとどまっ

ている(調査36)。

坪内の状況は、2カ所で明らかになっている。坪南部中央には桁行9間梁間4間の四面庇付きという極めて格式の高い建物が建てられており、その東側には内法一辻1.8mの蒸籠組みという平城京内最大規模の立派な井戸が設けられていた(調査33)。この井戸からは、神龜五年に設置された内匠寮の名が記された木簡の断片が出土している^⑩。なお、坪北東隅部分でも掘立柱建物、堀、井戸などを検出している(調査37)。

このように、十六坪も十五坪と同様に遺構の状況からみて個人の宅地とは考えにくく、宮外官衙の可能性が高い。十五・十六坪の丘には宮内の埴輪埴壇官衙(太政官説もある)と同一型式の軒瓦が全体の四分の一を占めること、埠が多数出土していること、官衙名の書かれた木簡が出土していることなど、遺物の特徴からもこの推定は裏付けられよう。ただその場合、大学寮の一郭と推定した七坪の状況とは明らかに異なり、宮内にも匹敵する極めて格式の高い空間を構成していることをどう理解するかが問題となろう。周知のように、平安京ではここは神泉苑の一郭であり、長岡京を経て平安京における神泉苑に繼承されていくような離宮的な機能を持った空間が十五・十六坪に置かれていたと考えることもあながち荒唐無稽とはいえないであろう。

以上、平城京左京三条一坊の状況について、発掘調査の成果を主たる素材として坪ごとに概観してきた。ここで坊全体の性格を含めてもう一度整理しておくこととしたい。

まず、坪の性格がある程度推定できるのは、七、十二、十四、十五、十六の5つの坪である。七坪は、少なくとも一般の宅地とは考えられず、大学寮の一郭である可能性がある。平安京との対比で言えば、北側の八坪も大学寮の一郭ということになる。一坪と二坪、二坪と七坪とは、それぞれ別個に利用されていた時期があるのは間違いないが、大学寮の整備に伴って奈良時代後半以降これらの4坪が一体として利用されるようになったとも考えられよう。十二坪も当初は1坪以上の占地の宅地と推定され、十一坪と一体で使用された可能性もある。

今回の調査地を含む十四坪は、1坪占地の宅地と推定できる。西隣の十一坪、北隣の十五坪とは別個であることが確実であるが、南隣の十二坪とは一体の可能性があり、最大2坪の占地も考えられる。

北東隅の十五、十六坪は奈良時代を通じて2坪占地の敷地として一体として利用されていた。一般の宅地とも、また単なる官衙ともみなしがたい非常に格式の高い建物配置をとる。内匠寮のような内廷官衙を示す文字資料の出土は、離宮的機能をもつ施設の存在を推測する一つの根拠となり得よう。

このように、左京三条一坊で確認される占地は最大で2坪であるが、十一・十二坪、十三・十四坪も一体の可能性があり、東半の8つの坪は九・十坪も含めて南北2坪ずつの4つの区画として利用されていた可能性がある。東側の左京三条二坊の「北窓」のような4坪占地の敷地こそ確認できないものの、平城宮前面にふさわしい宅地割りといってよい。西半については坪内の調査事例が少ないので実態は明らかではないが、七・八坪が2坪占地の大学寮と推定されることや東半の状況からみて、少なくとも1坪以上の占地の敷地として利用されていたとみて大過あるまい。ただ、十二坪の調査28の成果からも明らかなように、奈良時代後半になると、三条一坊にも1坪を細分した宅地が現れるようになる。この点は、左京一条一坊に本貫を置きここに居住した可能性のある下級官人がいたという、文献から知られる事実と符合するといつてよいであろう。

ここでもう一つ注目できるのは、全体として規格性のある大きな占地の敷地利用が行なわれている中で、平城宮に面した側とそうでない側とで敷地の性格が二分されていることである。すなわち、二条大路を挟んで平城宮に面する北側や朱雀大路に面した西側には、基本的には官衙など公的施設が置かれていたようである。これは宮前面という位置を配慮した上で、宮の機能を補完する地域として位置付けられたからであろう。その意味では個人の邸宅の所在地の可能性が高い左京三条二坊とは性格を異にする。こうした観点からみると、個人の邸宅を示す「宅」の表記のある木簡が出土している十坪、及びその北側の九坪の性格についても、なお慎重な検討が必要であろう。位置的にも実質的には平城宮の正門として機能した壬生門の正面にあたり、二条大路及び大路に準ずる機能を果たした東一坊坊間路に面する坪である。今後の調査成果に期待したい。

左京三条二坊の性格を考える上でもう一つ忘れてならない事実に、坊の中央に東一坊坊間大路が貫通することが挙げられる。その路面幅は80尺弱で、延喜左右京職式から知られる平安京の場合の10丈よりは狭いことが判明したが、それでも東西に分割される点に変わりはない。大路の存在が土地利用のあり方にいかなる影響を及ぼしてしているのか、東一坊坊間大路と朱雀大路とに挟まれた西半、特にこれまで未解明の点が多い三～六坪の調査成果に注目していく必要があろう。

このように、左京三条二坊は、京内の第一等地でありかつ宮の機能を補完する役割を果たすべき地域として位置付けられた場所であり、位置的にも性格的にもいわば平城宮と平城京の接点であったといってよい。これは当然右京三条二坊においても同様であろう。平城宮前面の左京・右京の三条二坊は、平城京の実態のみならず平城宮そのものの解明にも欠くことのできない重要な地域であるとの認識を新たにする必要がある。宮に準じた扱いが特に望まれる所以である^①。

- (1) 平城京左京三条二坊の調査成果の一つひとつについてはここでは言及しない。さしあたり、奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊・長屋王邸・藤原麻呂邸－発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第54編、近刊予定、第Ⅱ章第2節A「位置と環境」の項を参照されたい。
- (2) 神泉苑及びその復原については、太田静六「神泉苑の研究」(太田静六『寝殿造の研究』1987年、第2章第2節。初出の「神泉苑考」『建築学会論文集』4、1937年、を全面翻訳したもの)参照。
- (3) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』27、1993年、p. 4。
- (4) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』27、1993年、p. 4。
- (5) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』13、1980年、p.10。
- (6) 奈良国立文化財研究所『平城宮木簡』3、1981年、3259～3467号。東一坊大路西側溝SD3935は、宮東面外濠を兼ねるSD4951の南延長上にあたり、『平城宮木簡』3では第32次調査で同溝から出土した木簡を、平城宮東面から二条大路上、さらに十六坪東辺までSD4951出土木簡として一括して扱っている。出土位置は、『平城宮発掘調査出土木簡概報』4、1967年、pp. 6～7所掲の地区名と、『平城宮木簡』3 解説 p.39の出土状況図を対照させる必要がある。
- (7) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』27、1993年、p. 4。
- (8) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』27、1993年、p. 4。
- (9) 調査成果の収集、及び未公表成果の本稿における記載にあたっては、奈良市教育委員会埋蔵文化財調査センター篠原豊・氏、奈良県立橿原考古学研究所の楠元忻夫氏のご高配を得た。記して感謝の意を表する。

II 遺 跡

1 遺跡の概観

調査地は、東に東一坊大路、北に三条条間路が通る左京二条一坊十四坪の東北部にあたり、当該坪東北の条坊交叉点の対角には長屋王邸がある。奈良時代において、平城宮に近接した左京三条一・二坊は一等地であり、I-2でみたように、周辺の調査例では、貴族の邸宅や宮外官衙とも想定される遺構の存在が確認されている。また、かつて十四坪西側で実施した第46次調査では、築地盤とそれに開く棟門、総柱式高床倉庫や多数の掘立柱建物、あるいは池の一部かとも考えられる遺構等を検出し、築地盤で画された坪内の状況の一端が明らかになっている。

調査地の旧地形は、奈良盆地の北を限る奈良山から平城宮の南にのびる丘陵のきわめてなだらかな東南傾斜面上に位置し、平城京廃絶以降は水田となつたと考えられる。その後、工場建設に際し屢々盛土がなされ、今日に至っている。調査前の標高は約61.0~61.1mで、ほぼ平坦である。

基本的層序は、約40~50cmの盛土以下、旧水田耕土、床土と続き、現地表下約70~80cmで淡茶灰褐色砂質土の遺構検出面となる。遺構検出面の標高は、60.30~60.35mである。

2 遺 構

第249次調査区では、掘立柱塀8条、掘立柱建物12棟、素掘溝16条のほか若干の遺構を検出した。以下に概説しておく。

A 掘立柱塀

SA5635 発掘区南半の西壁に沿う位置で、南北方向の柱列を3間分検出した。柱間寸法は、10尺等間である。後述するように、SA5635の4つの柱穴は、SB5631の南半3間分の柱穴と東西方向でほぼ筋をそろえている。しかも、棟通りに残る柱穴の痕跡から、この南半部分は3室に間仕切りされていたことがわかる。したがって、SA5635はSB5631居室部分の目隠し塀であった可能性が大きいが、あるいは、SB5631は居室領域にのみ西庇をともなっていたのかもしれない。

SA5641 4間以上の東西塀。発掘区北寄りに位置する。柱間寸法は9尺だが、西から3間めだけが8尺と短いので、ここを門とした可能性がある。東端および東から2つめの柱穴には、底径25~27cmの柱根が残っていた。

SA5642 2間以上の南北塀で、柱間寸法は9尺等間。SA5641の東端の柱に取り付き、鍵の手に折れる。SA5641が発掘区外に続く可能性もあるので、その場合には、T字形につながることになる。

SA5643 3間以上の東西塀で、柱間寸法は4~7尺とばらつきがある。SA5641と重なるようにして、そのわずかに北側に位置する。遺構の重複関係からみると、SA5641よりも新しい。SA5644とは柱筋をそろえており、この2つの東西塀の間は11尺あく。

SA5644 1間以上の東西塀。SA5643と同一線上にある。柱間寸法は4尺。

SA5664 1間の南北塀と思われる。柱間寸法は8尺。発掘区南西寄りに位置する。目隠し塀もしくは棟門の遺構と思われるが、後者の可能性は小さいといえよう。

SA5668 2間の南北塀で、柱間寸法は9尺等間。遺構の重複関係からみると、最も古い時期の柱列と考えられる。

SA5669 発掘区中央から東へのびる2間以上の最も古い時期の東西扉。柱間寸法は7尺等間。

B 摨立柱建物

SB5630 衍行7間×梁間3間の東庇つき南北棟。発掘区中央東寄りに位置する。身舎の柱間寸法は、衍行方向が10尺等間で、梁行方向が8尺等間。庇の出は11尺と長い。身舎東西の両側柱列では、北端および北から2つめの柱穴に、底径28~32cmの柱根が残っていた。また、東拡張区で確認した東庇の柱列においても、やはり北端および北から2つめの柱穴に柱根が残っていた。遺存状態はよくなかったが、身舎の柱根より、一まわり小さいと考えられる。

SB5631 発掘区中央の大きな南北棟。東庇のついた衍行7間×梁間3間の平面で、身舎の柱間寸法はSB5630と同じであるが、庇の出のみ9尺と短い。身舎の南側3間分には、棟通りに間仕切り用の柱の痕跡が残っている。したがって、身舎は北側4間が「堂」的な広間で、南側3間が3つの「室」に区分されていた可能性が大きい。すでに述べたように、西に8尺離れた位置にある南北扉 SA5635はSB5631南半3間分と柱筋をそろえており、居室部分の日隠し扉もしくは居室に附属する西庇の柱列の可能性がある。遺構の重複関係からみると、SB5630よりも古い。建物方位は、北でわずかに西にふれている。身舎の西側柱列の南から4つめの柱穴には、底径28cmの柱根が残っていた。

SB5632 西壁中央沿いに柱列を4間分検出した。南北二面庇をともなう東西棟の妻柱列と思われ、身舎・庇のいずれも、柱間寸法は11尺である。衍行方向の規模は不明だが、柱掘形は約150cm四方もあり、正殿クラスの建物とみてよかろう。南から2つめの柱穴には、底径28cmの柱根が残っていた。また、北から3つめの柱穴では、底径30.5cmの柱根の底に40×27×15cmの角材を敷いて礎板としていた。

SB5633 衍行1間以上×梁間2間の東西棟。発掘区中央西壁寄りに位置する。柱間寸法は衍行が9尺、梁行は10尺と8尺にわかれる。遺構の重複関係からみると、SB5631、SB5632のいずれよりも新しい。

SB5634 衍行7間以上×梁間2間以上の南北棟。発掘区東壁から東拡張区へひろがる。柱間寸法は衍行方向が6尺等間、梁行方向が6.5尺等間である。遺構の重複関係からみると、SB5630よりも新しい。西側柱列の北端に底径14cm、北から5つめの柱穴に底径20cmの柱根が残っていた。

SB5636 衍行1間以上×梁間2間以上の東西棟。発掘区南西隅に位置する。柱間寸法は、衍行方向が8尺、梁行方向が9尺等間である。遺構の重複関係からみると、SB5631、SB5637よりも新しい。妻柱の抜取り穴から埠が出土した。

SB5637 衍行1間以上×梁間2間以上の南北棟で、西に庇がつく。発掘区南東隅に位置し、SB5631と柱筋がほぼそろう。身舎の柱間寸法は衍行・梁行方向とも10尺で、庇の出が11尺とわずかに長い。遺構の重複関係からみると、SB5638よりも古い時期の建物である。

SB5638 発掘区南東隅に位置する1間以上×1間以上の挿立柱建物。南北棟か東西棟かは不明である。柱間寸法は、衍行・梁行とともに11尺。SB5638の3つの柱穴は、いずれも皿状を呈しており、遺構面からの深さが30~55cmほどしかない。SB5638とほぼ同規模の大型柱穴をもつSB5630、SB5631、SB5632、SB5637などの挿立柱建物では、その柱穴の深さが1m前後に達するものもあり、SB5638の柱穴はきわめて浅いことがわかる。しかも、穴の形態は皿状であることから、SB5638は礎石建物であった可能性も想定されよう。ただし、礎石建物の存在を示す根石等はまっ

たくみつかっていない。

SB5639 発掘区南東隅で2つの柱穴を検出した。その柱穴はSB5637、SB5638とはほぼ同規模の大きなものであるから、1間以上×1間以上の掘立柱建物と推定できる。柱間寸法は9尺である。

SB5640 衍行1間以上×梁間3間以上の南北棟で、東に庇がつく。発掘区北西隅に位置する。身舎の柱間寸法は衍行方向が9尺、梁行方向が6.5尺で、庇の出も6.5尺である。

SB5663 発掘区北半でみつかった柱穴2個、柱間1間(7尺)の遺構である。門隠し扉か棟門のいずれかと考えられる。建物との位置関係から、棟門であるとしたならば、左右に築地壝をともなっていた可能性が大きい。

SB5665 発掘区南西隅で、西壁沿いに柱穴列2間分を検出した。東西棟の妻柱列である可能性が大きい。柱間寸法は9尺等間。

C 溝

あわせて16条の素掘の溝を検出したが、そのうち14条は耕作用の溝で、以下の2条のみが奈良時代以前の遺構である。

SD5661 発掘区北西隅を流れる斜行溝。遺物は出土していないが、古墳時代の溝と思われる。幅30~100cm、長さ5m以上。

SD5652 SD5651の南3.3mのところを流れる奈良時代の東西溝。幅約20cm、長さ3m以上で、遺構の重複関係からみると、SB5630、SB5631よりも古い。

D その他

SK5645 発掘区北東隅の大きな不整形土坑(6m以上×3.5m以上)で、鉛滓・炉壁・壁体や炭が大量に出土しており、金匱鑄造工房のごみとして穴の可能性が大きい。遺構の重複関係からみると、SA5642よりも新しい。

SK5660 南拡張区でみつかった不整形土坑(1.5m×2m)。奈良時代中頃の土器が出土した。遺構の重複関係からみると、SB5637よりも新しい。

SK5662 発掘区北西隅の浅い不整形土坑(1.8m×1.2m以上)。SD5661と同質の黒色土を埋土とする。遺物は出土していないが、おそらく古墳時代と考えられる土坑である。

SK5666 発掘区中央北寄り、東壁沿いの小型の土坑(0.7m×1.3m)。

SX5670 発掘区南寄りの東壁沿いでみつかった土器埋納遺構。胞衣壺を納めていた。

SK5671 発掘区東半中央北寄りの小土坑。須恵器碗Aが出土した。

Tab. 2 第46次発掘調査 建築遺構一覧

番号	構造	方向	規模	柱間・庇			備考
				梁間	桁行	位臵	
SA201	築地盤	南北	幅約2m				左京一条一坊十四坪の西面築地盤。北側に寄柱の痕跡がのこる。
SA240	掘立柱扉	東西	5以上		9.5		柱穴6個検出。
SA241	掘立柱扉	東西	6以上		9		柱穴7個検出。SA240のすぐ南側。
SA270	掘立柱扉	東西	6以上		7~8		柱穴7個検出。柱穴は小さく、柱間寸法にも長短がある。
							築地盤SA201にとりつく。
SA330	掘立柱扉	南北	8		9		SB320、SB350より古い。
SA388	掘立柱扉	南北	4以上		7		道路側溝SD385下層で検出された人気な柱列。
SB202	掘立柱建物	東西	2×1以上	7	7		SB203より古い。
SB203	掘立柱建物	東西	2×2以上	7	7		SB202より新しい。同規模か。
SB204	掘立柱建物	東西	2以上×1以上	5	6	西	床張りの建物。
SB205	掘立柱建物	東西	2×4	6.5	7		
SB220	掘立柱建物	東西	3×3	7	7	南北	5.5 梁間1間の身舎に南北両庇がつく。
SB230	掘立柱建物	東西	2×6	4	6		梁間は西側は1間、東側は中央に柱がたち2間となる。
SB235	掘立柱建物	東西	3×2以上	7	7	南	12 東壁沿い。
SB245	掘立柱建物	南北	3×5	8	7	西	10
SB250A	掘立柱建物	南北	1		7		SA201をぬける棟門（I・II期）。
SB250B	掘立柱建物	南北	1		11		SA201をぬける棟門（III期以降）。
SB260	掘立柱建物		3×3	7	8		総柱式高床倉庫。
SB280	掘立柱建物		3×3	7	8		総柱式高床倉庫。
SB290	掘立柱建物	東西	2×?		9		東壁沿い。東西棟の可能性大きい。
SB300	掘立柱建物	南北	4×5	8	8.5	東西	9
SB310	掘立柱建物	南北	3×6	8	8.5	東	10
SB320	掘立柱建物	南北	2×5	10	10		柱穴大きい。
SB321	掘立柱建物	南北	2×5	11	9.5		柱穴大きい。
SB322	掘立柱建物	南北	2×3	5.5	7.5		北側の妻柱穴が他の建物の柱穴に覆われている。
SB340	掘立柱建物	東西	2×6以上	8	8		
SB350	掘立柱建物	東西	3×7	7.5	8	南	8.5
SB360	掘立柱建物		2×2	7	7		2×2の総柱式だが、東面中央柱を欠く。
SB361	掘立柱建物	南北	2×4	6.5	7		
SB370	掘立柱建物	東西	4×6	5.5	9	南北	8 北庇は中央の2間分のみ。
SB380	掘立柱建物	東西	2×1以上	9	8		
SB381	掘立柱建物	東西	1以上×1以上	9.5	8.5		東西棟か。
SB390	掘立柱建物	東西	1以上×6	8.5	8		妻柱の位置が東西向山で異なる。

規格は間数、柱間・庇の出の単位は尺

III 遺 物

1 瓦 塚

1994年度の第249次調査で出土した瓦塚は、丸瓦5.3kg(55点)、平瓦8.0kg(70点)と塚1点である。軒瓦は出土していない。調査面積に比べて、瓦塚の数量は少ないといえる。一方、同一塚の西辺部を対象として、当研究所が1967年度に行った第46次調査では、軒丸瓦10種25点、軒平瓦6種47点をはじめとする多数の瓦が出土している。ここでは、左京二条一坊十四坪全体の瓦の様相を明らかにするために、両者を一括して報告することにしたい。なお、軒丸瓦の外縁形態や軒平瓦の顎形態の分類は、『平城宮発掘調査報告Ⅲ』によるものとする。

A 軒丸瓦 (Pl. 6・7, Fig. 4)

6091A 外区内縁に珠文、外区外縁に逆時計回りの偏行唐草文をめぐらす複弁八葉蓮華文である。外縁は緩やかに内轉しながら立ち上がるが、上端には平坦面をもたない。第46次調査区から16点が出土しており、軒丸瓦全体の64%を占める。SK395に8点含まれるのが目を引くほか、南端付近や、北半部にも分布する。全て、別に作った丸瓦を瓦当に接合する、接合式である。端面まで縦方向の縫叩きを施した丸瓦を瓦当に接合して、内外面に粘土を足したのち、丸瓦部凸面に縦方向のナデを加える。外線上端から8mmほどドの位置に、端部痕跡が残る。瓦当厚3.4~4.1cm。瓦当裏面が平坦なものと、中くぼみになるものがある。灰白~灰黒色の軟質のものが多い。

6225A 外区内縁に團線文、外縁に凸鋸齒文をめぐらす複弁八葉蓮華文。第46次調査区北半部のSA201近辺から、小片1点が出土している。瓦当と丸瓦部の製作が一体として行われ、丸瓦の接合痕跡をもたない、非接合式である。瓦当厚4.4cm。軟質で灰白色を呈する。

6225C 文様構成は6225Aと同じだが、弁端が丸みを帯びる。第46次調査区のSK395から1点出土。非接合式であろう。瓦当厚4.7cmで、丸瓦部に縦方向のナデを施す。軟質で灰白色を示す。

6227D 外区内縁に團線文、外縁を素文とする複弁八葉蓮華文である。第46次調査区の南端付近で、1点出土した。非接合式である。瓦当厚は4.4cmで、瓦当裏面を円周に沿ってヘラケズリし、中ほどがややくぼむ。軟質で灰白色を示す。

6273B 外区内縁に珠文、外縁に凸鋸齒文を配する、藤原宮式の複弁八葉蓮華文。第46次調査区中央部のSA201近辺から、外縁のごく一部の破片が1点出土した。硬質で青灰色を示す。

6281Ba 外区内縁に珠文、外縁に線鋸齒文をめぐらす、藤原宮式の複弁八葉蓮華文。第46次調査区南端のSA201東雨落溝から、1点出土した。

6284Eb 文様の基本構成は6281型式と共通するが、中房蓮子が一重となる。従来、6282Faとしていたが、6284Eaの中心蓮子を大きく彫り直したもの^⑤。第46次調査区のSK395から、1点出土している。接合式で、丸瓦部の接合は浅い。瓦当厚3.6cm。灰白色を示し、軟質である。

6304B 文様構成はほぼ同じだが、突出した中房と長い蓮弁を特徴とする。第46次調査区のSB260西南部から、1点出土した。接合式で、瓦当厚4.5cm。灰黒色を示し、軟質である。

6307C 間弁をもたない小型の複弁七葉蓮華文。第46次調査区中央部から1点出土した。

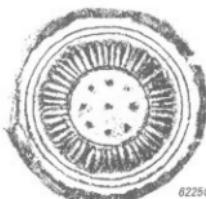
6308I やはり、外区内縁に珠文、外縁に線鋸齒文をおく複弁八葉蓮華文だが、間弁が独立するタイプである。第46次調査区北部から1点出土。接合式で、瓦当厚3.9cm。瓦当裏面は、外周をヘラケズリし、中くぼみとなる。比較的硬質で、淡青灰色を呈する。



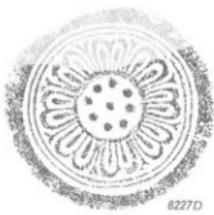
6091A



6225A



6225C



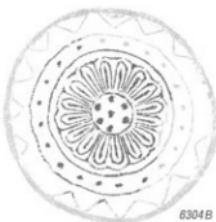
6227D



6281Ba



6284Eb



6304B



6307C



6308I



6644C



6691B



6882B



6732C



6775C



6801A

Fig. 4 軒瓦拓影 1:4

B 軒平瓦 (PL. 8, Fig. 4)

- 6644C 上外区に珠文、下外区に線鋸歯文を配する、右偏行の変形忍冬唐草文である。第46次調査区南端部から1点出土した。頸長6.6cmの段頸I L。軟質で灰黒色を呈する。
- 6682B 外区に珠文をめぐらす三回反転の均整唐草文である。第46次調査区の南端、東一坊坊間東小路の東側溝SD385から、1点出土した。頸長5.0cmの段頸I S。硬質で淡灰色を呈する。
- 6691B 外区を珠文とする四回反転の均整唐草文である。第46次調査区から33点出土しており、軒平瓦全体の70%を占める。池SG210やSA201東雨落溝、SB204西北隅柱穴をはじめとして、調査区南端部からの出土が目立つが、SK395の3点など、調査区中央部から北半部にかけても分布する。整形した瓦当面と範の形状が一致せず、瓦当の両側の下部に、範の外側の空白部を残すものが多い。頸形態は、ほとんどが曲線頸IIであるが、瓦当面に対して鈍角をなす、明瞭な顎面を削り出すのが特徴である。顎面の幅は、1.0~1.5cm。また、わずかではあるが、顎面を形成しない曲線頸Iの例も存在する。平瓦部は、凹凸両面の瓦当寄りの部分に、幅広いヨコナデを施す。凸面は、縦方向の繩叩きを行ったのちに、一部横方向の繩叩きを重ねるものと、縦方向の繩叩きのみを行うものがある。6691Bには明瞭な範傷が認められ、第46次調査出土資料に関しては、範傷の進行によって、第I~第III段階に区分することができる (Fig. 5)。曲線頸Iの資料は第I段階に属するが、この段階にも曲線頸IIの例が存在する。第II・第III段階の資料は、すべて曲線頸IIである。平瓦部凸面の繩叩きは、縦横両方向の叩きを重ねるものと、縦方向のみのものが、いずれの段階にも認められる。したがって、こうした叩きの手法の差は、時期差には直結していない。灰白~灰黒色の軟質のものと、青灰色の硬質のものがある。
- 6732C 外区に粗い珠文を配する、いわゆる東大寺式の三回反転の均整唐草文である。第46次調査区から8点出土した。そのうち5点がSK395から、2点が中央部のSA201の東側からの出土である。幅の広い顎面をもつ曲線頸II。軟質で灰黒色を呈する。
- 6775C 上向きの棒状弁を中央におく均整唐草文である。唐草文の反転は三回だが、四回とみることもできる。外区には珠文をめぐらす。第46次調査区北半部のSA201近辺から、1点出土した。直線頸で、凸面には縦~斜め方向のヘラケズリを施す。灰白色を示し、軟質である。
- 6801A 中心飾りに「修」の異体字をおき、両端から中心部に向かう、左右各三単位の飛雲文を配する。外区は素文である。第46次調査区中央部のSA201東雨落溝と調査区南端部から、それぞれ1点ずつ出土した。顎面の幅約1.5cmの曲線頸IIで、頸部に板ナデまたはヘラケズリを施す。平瓦部凸面は、縦方向の繩叩きのち、瓦当寄りにヨコナデを加える。凹面は、端部のみわずかに横方向のヘラケズリを行い、瓦当近くまで布目が残る。比較的硬質で、灰黒色を呈する。



Fig. 5 軒平瓦6691Bの範傷進行

Tab. 3 軒瓦計測表

型式	直 径 径 径	内 区				外 区				全 長	外 縁 形 態	出 上 点 数	%				
		中 房 子 数	進 区 條	弁 区 幅	弁 区 幅	内 縁 幅	外 縁 幅	文 様	幅 高								
						広											
軒	6091A	144	26	1+4	77	20	T8	33	14	S16	19	11	HK	383	三角縁	16	64.0
	6225A	166	68	1+8	116	36	F8	25	12	K	13	8	RV26	373	傾斜縁 I	1	4.0
	C	155	62	1+8	111	29	F8	22	7	K	15	7	RV32		傾斜縁 I	1	4.0
丸	6227D	167	58	1+8	119	31	F8	24	9	K	13	4	—		傾斜縁 I	1	4.0
	6273B	180	64	1+5+9	128	32	F8	26	13	S40	13	12	RV64		三角縁	1	4.0
	6281Ba	184	62	1+8+8	120	29	F8	32	13	S32	19	11	LV37		三角縁	1	4.0
瓦	6284Eb	150	40	1+6	92	32	F8	33	20	S24	13	14	LV24	360	傾斜縁 II	1	4.0
	6304B	172	37	1+6	102	27	F8	35	15	S20	20	11	LV16		傾斜縁 II	1	4.0
	6307C	123	21	1+4	67	22	F7	28	10	S14	14	11	LV11		傾斜縁 I	1	4.0
	6308I	162	38	1+6	98	26	F8	32	13	S22	19	11	LV16		傾斜縁 II	1	4.0
	合計															25	100

T-単弁 F-複弁 S-珠文 K-團線文 HK-偏行唐草文 LV-源創體文 RV-凸鈍體文

型式	瓦 当 面										全 長	顎 形 態	出 上 点 数	%			
	上 弧 弦 幅	下 弧 弦 深	厚 幅	内 区 厚 さ	内 区 文 様	上 外 区 厚 さ	上 外 区 文 様	下 外 区 厚 さ	脇 区 幅	脇 区 文 様							
軒	6644C			47	13	HN	19	S17	15	LV	2	—	2	段顎 I L	1	2.1	
	6682B			47	19	KK	14	S17	14	S17	15	S3	5	段顎 I S	1	2.1	
	6691B	252	52	282	51	23	KK	15	S17	13	S16	31	S3	3	373	曲線顎 I 曲線顎 II	33 70.2
平	6732C	305	44	307	60	30	KK	14	S 9	16	S 9	18	S3	3	397	曲線顎 II	8 17.1
	6775C				59	32	KK	12	S11	15	S11	19	S3	2		直線顎	1 2.1
	6801A	295	60	292	62	35	U	14	—	13	—	16	—	4		曲線顎 II	2 4.3
型式不明	合計															1	2.1
																47	100

HN-変形圓行忍冬唐草文 KK-均整唐草文 S-珠文 K-團線文 LV-源創體文 U-雲文

脇区幅は左右の平均または一方の値

C その他の瓦塊 (Pl. 9, Fig. 7)

丸瓦・平瓦 前述のように、第249次調査では、丸瓦5.3kg (55点)、平瓦8.0kg (70点) が出土した。一方、第46次調査区からは、整理袋にして150袋に及ぶ大量の丸瓦、平瓦が出土している。しかしながら、諸般の事情により、今回は、後者について充分な検討を加えるに至らなかった。ここでは、代表的なものをいくつか取り上げるにとどめる。丸瓦(1)は、全長37.8cm、玉縁長5.3cm、胴部径13.7cm、厚さ1.6cm、現存重量2.0kgである。凸面に縦方向の繩叩きを施したのち、ヨコナデを加える。平瓦(4)は、凸面全体に、離れ砂を併用した縦方向の繩叩きを行い、その後の調整を行わない。全長32.0cm、広端幅24.5cm、厚さ2.2cm、現存重量2.8kgである。平瓦(5)は、凸面に粗い格子叩きを施したのち、ヨコナデを加えるもの。平瓦(6)は、凸面に縦方向の繩叩き、凹面に横骨痕を残し、柄巻作りと考えられるものである。

埠 第249次調査区南端部のSB5636の東妻柱を抜き取った穴の中から、完形品1点が出土している(2)。31.0×16.0×6.5cm、重量5.4kgの直方体。軟質で灰白色を呈する。長辺と短辺の比が2:1に近く、それぞれ1尺と5寸を意識して製作したものであろう。

簾描瓦 第46次調査区北部のSA201近辺から、簾描瓦1点が出土している(3)。焼成前の丸瓦の凸面に、棒状の工具を用いて線を重ねたもの。青灰色を示し、硬質である。

刻印瓦 第46次調査区中央部のSK395から、「理」の刻印瓦1点が出土している(7)。「余良国立文化財研究所基準資料V」の「理(じ)」である。平瓦の凹面の狭端付近、右寄りの位置に押捺したもの。文字は、右側縁を上にした状態で正位である。

D 小 結

軒瓦6091A-6691Bの組合せ 第46次調査で出土した軒瓦の大半を占めるのは、軒丸瓦6091Aと軒平瓦6691Bである(Fig. 6)。それぞれ、軒丸瓦と軒平瓦の64.0%と70.2%を占めており、分布のうえでも、ほぼ一致した状況を示す。胎土や焼成が近似することとあわせて、これらが組み合うことは、疑いの余地がない。一方、軒瓦以外の丸瓦・平瓦の分布については、充分に明らかにしえない部分があるが、調査区内に明確な礎石建物が存在せず、その多くは築地SA201に伴うものと推定される。したがって、軒瓦6091A-6691Bについても、総瓦葺の屋根の軒先を飾ったと見るよりは、桧皮葺の建物の棟部分(壇棟)に用いられたと考えるのが妥当である。

この軒瓦の組合せは、今のところ、平城宮内および京内のほかの地域では確認されていない。左京三条一坊十四坪に特徴的な組合せであるといえる。一方、この北側の十五・十六坪では、出土した軒瓦のほとんどが平城宮と同範囲にあり、造構やほかの遺物の様相とあわせて、個人の邸宅ではなく、宮外官衙と推定されている⁽³⁾。それとの比較においては、十四坪は、むしろ異なる特徴を示しているといえよう。

なお、十四坪内では、SA201近辺での軒瓦の出土量は少なく、築地に軒瓦を使用していたかどうかは疑問である。築地での軒瓦使用に否定的な意見が、他でも得られている⁽³⁾ことを勘案すれば、この場合も、築地には軒瓦を葺いていなかった可能性が高い。

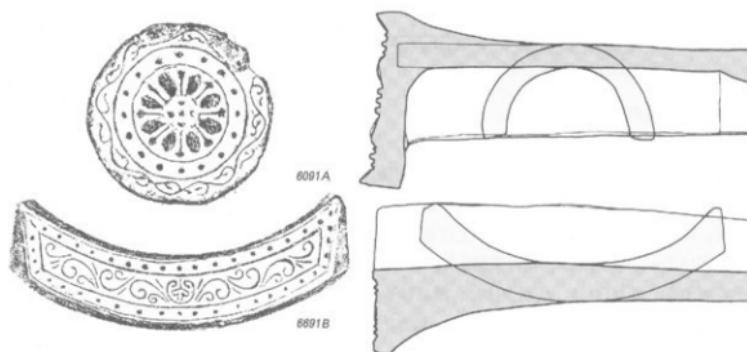


Fig. 6 軒瓦6091A-6691B 1:4

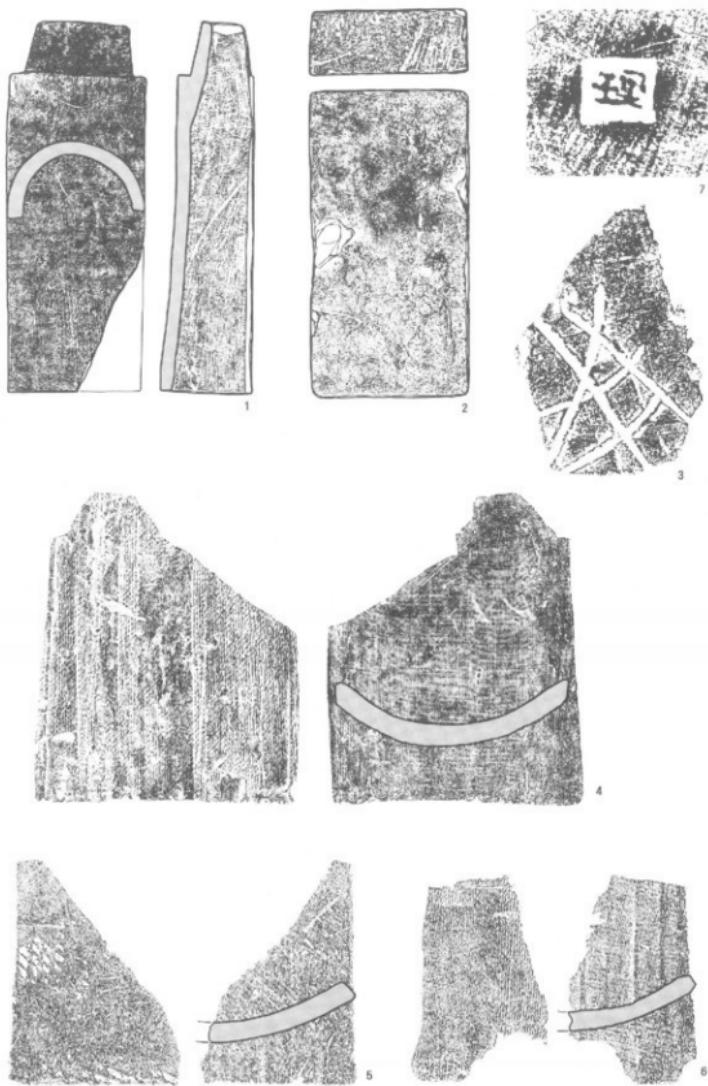


Fig. 7 瓦等実測図・拓影 1・2・4～6-1:5 3-1:2 7-3:4

6091A - 6691Bの年代観 従来、6091Aを出土する遺跡としては、ほかに大安寺が知られている。大安寺については、天平十九年（747）勘録の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』の記載から、塔を除いて、伽藍がこの頃までに整っていたことがわかる。そして6091Aは、軒平瓦6717Aと組み、平城宮軒瓦編年第II期（721-745）の後半の製作にかかるものと想定された⁽¹⁾。

実際には、大安寺の軒瓦に占める6091Aの比率は、それほど多くはなく⁽²⁾、大安寺の創建にかかわる主要な軒丸瓦とみるとには、やや問題が残る。しかし、平城京左京五条五坊十三坪から、最近6091A50点がまとまって出土した⁽³⁾。数量および胎土・焼成の一一致から、これと組み合う軒平瓦は、6717型式であることが確実であり、その内訳は、6717A 6点・6717B（新種）36点・種別不明17点である。したがって、ここでは、6091A - 6717Bを基本とし、補足的に6717Aが組み合わされたと考えてよい。これらの軒平瓦の顎形態は、直線顎に近いものもいくつか認められるが、基本的に曲線顎IIである⁽⁴⁾。

一方、大安寺の6717型式は、現在のところA種に限られ、B種は確認されていない。ただし、左京五条五坊十三坪と大安寺出土の6091A - 6717A・Bは、胎土や焼成などの特徴が近似しており、同じ瓦屋での製作と考えられる。そして、大安寺出土の6717Aには、段顎と曲線顎IIの二種類がある⁽⁵⁾。よって、6717型式の顎形態が、段顎から曲線顎IIへ変化したとすれば、大安寺への供給が先行し、やや遅れて、左京五条五坊への供給が行われたと推定することができる。

曲線顎IIの成立については、天平十二年（740）の恭仁宮への遷都が大きな画期となったことが指摘されている⁽⁶⁾。したがって、少なくとも左京五条五坊十三坪の6717A・Bの製作は、それに先立つことはなく、天平十七年（745）の平城遷都以後とみるのが妥当である。これと組み合う6091Aについても、同様の年代をあてることができよう。

次に、今回の調査地である左京三条一坊十四坪出土の6091Aと、大安寺・左京五条五坊十三坪の6091Aを比較すると、前者は、後者にくらべて文様が不鮮明となり、範傷も拡大していることがわかる。時期的に遅れることは間違いない。また、前者が砂粒をほとんど含まない精良な胎土を用いているのに対して、後者の胎土には砂粒を多量に含んでいる。丸瓦部の径も後者の方が大きく、瓦当裏面はすべて平坦である。おそらく両者は、製作時期を異にするだけでなく、生産にあたった瓦屋自体も異なるのであろう。

左京三条一坊十四坪で6091Aと組み合う6691Bについては、平城宮を含めて、他にまとまった出土が知られていない。しかし、文様上、恭仁宮所用の6691Aに後出する要素を有すること、また、やや特徴的ながら曲線顎IIの形態をとることから、少なくとも当該坪の6691Bの製作年代については、平城遷都以後とみるべきであろう。

ところで、6691Bは、大和以外で、近江における出土例が知られている⁽⁷⁾。いずれも表探資料であるが、とくに大津市の膳所廃寺南方では、ほかに平城宮同范の6235Bと6763Aがあわせて採集されており、平城宮・京との強い関連がうかがえる。これらを含めて、平城宮・京の軒瓦の同范関係を詳細に追究した山崎信二氏は、膳所廃寺南方の資料を、宮都造営に伴う同范軒瓦と位置づけ、保良宮に関係するものであると考定した⁽⁸⁾。

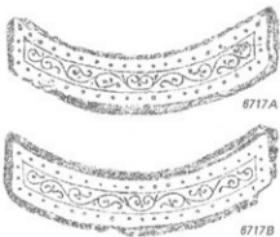


Fig. 8 軒平瓦6717A・B 1:5

保良宮は、天平宝字三年（759）に造営を開始している（『続日本紀』天平宝字一年十一月戊寅（16日）条）。また天平宝字五年（761）には、淳仁が保良宮に行幸し（同天平宝字五年十月甲子（13日）条）、造営の功に対する叙位がなされているから、この時点までは、ほぼ完成を迎えていたと考えられる。したがって、6691Bが保良宮所用瓦として製作されたとすれば、その年代は、天平宝字年間の前半に求めることができる。

この場合、6691Bの範が、人和から近江へ移動した可能性は高い。すると、左京三条一坊十四坪の6691Bの製作年代の下限は、天平宝字年間前半におくことができるようになる。一方、ここで6691Bと組み合う6091Aについては、上述のように、天平十七年（745）以降の製作とみられる左京五条五坊十二坪の同范資料より、さらに製作が遅れることは間違いない。よって、左京三条一坊十四坪の6091A～6691Bについては、年代の幅をかなり限定することが可能である。また、胎土や技法において、左京五条五坊十二坪の資料との間に懸隔があり、瓦屋を異にする可能性があることを考慮すれば、製作年代が天平年間に遡ることはないと思う。すでに想定されているように、天平勝宝年間（749～757）以降の製作とみるべきであろう。したがって、保良宮造営との間に、大きな時期差は存在しない。左京三条一坊十四坪への供給品の製作後、引き続いて、6691Bの範が保良宮所用瓦の製作にふりむけられた可能性は高いのではないだろうか。

- (1) 佐川正敏「平城宮の軒丸瓦6284Eと6282Fa」『奈良国立文化財研究所年報1992』1992年、p.49。
- (2) 小野健吉「左京三条一坊十・十五・十六坪の調査 第230次」『1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1993年、pp.57～66。
- (3) 小沢毅「西隆寺創建期の軒瓦」『西隆寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所四十周年記念学報第52冊、1993年、pp.123～136。
- (4) 毛利光俊彦・花谷浩「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告Ⅷ』1991年、pp.251～342。ただし、左京三条一坊十四坪で6691Bと組む6091Aについては、範を再用した第Ⅲ期後半（749～757）の製作とみる。
- (5) 中井公「大安寺2～大官大寺から大安寺へ」『古代寺院の移建と再建を考える』1995年、pp.24～39。内訳不明の奈良県調査分を除くと、6091Aは、軒丸瓦391点のうち、9点にすぎない。
- (6) 宮崎正裕・松浦五輪美「平城京左京五条五坊十二坪の調査 第274次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』1994年、pp.78～82。
- (7) 中井公・宮崎正裕両氏のご厚意により、奈良市埋蔵文化財センターにおいて、実見の機会を得た。
- (8) 山本忠尚「大安寺の屋瓦」『大安寺史・史料』1984年、pp.909～934。
- (9) 前掲註(4)および佐川正敏「第Ⅱ期造構の造営瓦とその年代」『平城宮発掘調査報告Ⅸ』奈良国立文化財研究所四十周年記念学報第51冊、1993年、pp.96～117。
- (10) 西田弘「膳所魔寺付 奈良時代の古瓦出土地」「国昌寺跡」「近江の古代寺院」1989年、pp.245～259。6691B同范資料についての記述は、前者のp.249にある。また、出土地点など不明確な部分を残すが、後者のp.256第6図9も、絶傷と細部にいたる文様の一一致からみて、6691Bであることが確実である。
- (11) 山崎信二「平城宮・京と同范の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察」1994年、pp.2～4。

2 土 器

今回の調査では、土坑・柱穴等から少量の土器が出土した。いずれも奈良時代の土師器、須恵器および陶硯で、それ以外のものはない。ここでは、比較的まとまっている土坑出土の土器と、柱穴出土の土器を中心にして述べる。なお、土器埋納遺構出土の土器についてはIV-2で記す。また、第46次調査でも若干量の土器が出土しているが、特に注目されるものは少ないので、陶硯を紹介するのにとどめることとする^②。

SK5660出土土器 (PL.10, Fig. 9-3~9) 南拡張区にある不整形な土坑から、土師器、須恵器がまとまって出土した。土師器は保存状態が不良で、手法等の観察が困難である。3は土師器碗Cで、e手法で調整する。4~9は須恵器で、全てI群土器であるが、焼成が不良で、生焼けのものが多い。4・5は杯B III蓋。口縁端部がわずかに彎曲し、頂部をロクロナデで調整する。6は杯B III。全面ロクロナデで調整する。7は杯A III、8は皿A、9は皿B。ともに小破片であり、底部を欠失する。全面ロクロナデで調整する。これらの土器は平城宮土器III新~IVに属する。

SK5671出土土器 (PL.10, Fig. 9-12) 調査区東端近くにある小土坑で、須恵器碗Aが1点出土した。円筒形に近い器形で、口縁端部は平坦な面をなす。底部外面にロクロ削りを施し、それ以外はロクロナデで調整する。灰白色を呈し、焼成の堅緻なVI群土器で、美濃産であろう。

SB5630出土土器 (PL.10, Fig. 9-10~11) 挖立柱建物SB5630の西側柱の南から2間目の柱穴の柱抜取り穴から、平城宮土器Vに属する土師器碗A III (10)、皿A II (11) が出土した。とともにほぼ完形であるが、風化が著しい。碗A IIIは、c手法で調整し、口縁部外面に全面磨きを施すと思われるが、表面の風化、剥落が著しいため、不明である。皿A IIは、c0手法で調整する。

陶 砚 (PL.10-21~25, Fig. 10-21~24) 21のみが第249次調査で出土したもので、他は第46次調査の出土である。21は低圈足硯で、SB5630東庇の北から1間目の柱抜取り穴から出土。外堤の突帶をほとんど欠失する以外は、ほぼ完形である。陸部を一段高く表出し、周間に低い内堤をめぐらせる有堤式である。底部の圈足は低く、貼り付けによって成形し、底部と側面にはロクロ削りを施す。陸部には磨きを施し、上面にはわずかに自然釉が降着する。この硯は底部をも硯面として使用しており、陸部とともに磨滅のために平滑となっている。類例は平城宮第一次大極殿地区SD3715⁽²⁾や左京三条二坊一坪⁽³⁾などに見られる。22は圈足円面硯。陸部と海部の境に区画を設けない無堤式で、脚部には透しを入れる。透しは14カ所に復原できるが、上端が丸くなるものもあり、全てが直線的な形態ではないのかも知れない。硯面には降灰が見られ、中央部は使用のために磨滅している。23は蹄脚円面硯。同一個体の硯部、台脚基底から図上復原した。脚柱は

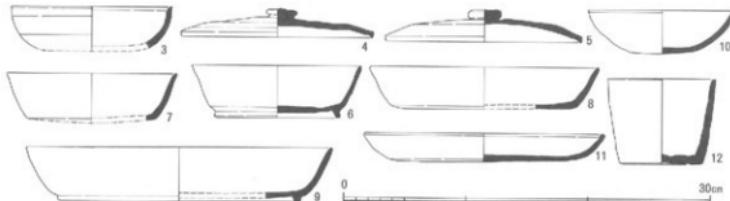


Fig. 9 土器実測図 1:4

欠失する。陸部と海部を区別する有堤式で、硯部の外面に1条の突帯をめぐらす。突帯下には球形の脚頭が付き、脚頭の下部には突帯状の脚節がある。脚頭は24個に復原でき、残存しているのは3個であるが、全て同形同大で、型作りによって成形し、貼り付けたものと見られ、脚頭の右脇には范型のあたりがある。この硯は、硯部と台脚基底を別々に成形した後、脚柱によって結合する蹄脚硯A型式で、台脚基底には脚柱を接合した後に粘土を添付して補強した痕跡が残る。側面、および台脚基底上面には降灰が見られる。24は風字硯。硯尻右端部の破片で、脚が1個残る。硯面、側縁、外堤部を削りによって整形した後に脚を貼り付け、断面九角形に面取りする。硯面にはわずかに降灰が見られ、中央部付近は磨滅している。25は圈足円面硯。外堤部と突帯、脚部上端の小破片で、口径約20cm、透しの数は20個に復原できる。有堤式であろう。

- (1) 砚の形態、各部の名称については、奈良国立文化財研究所『埋蔵文化財ニュース』41、1983年、に従った。
- (2) 奈良国立文化財研究所『埋蔵文化財ニュース』41、1983年。
- (3) 奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊-長屋王邸・藤原麻呂邸-発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第54冊、近刊予定。

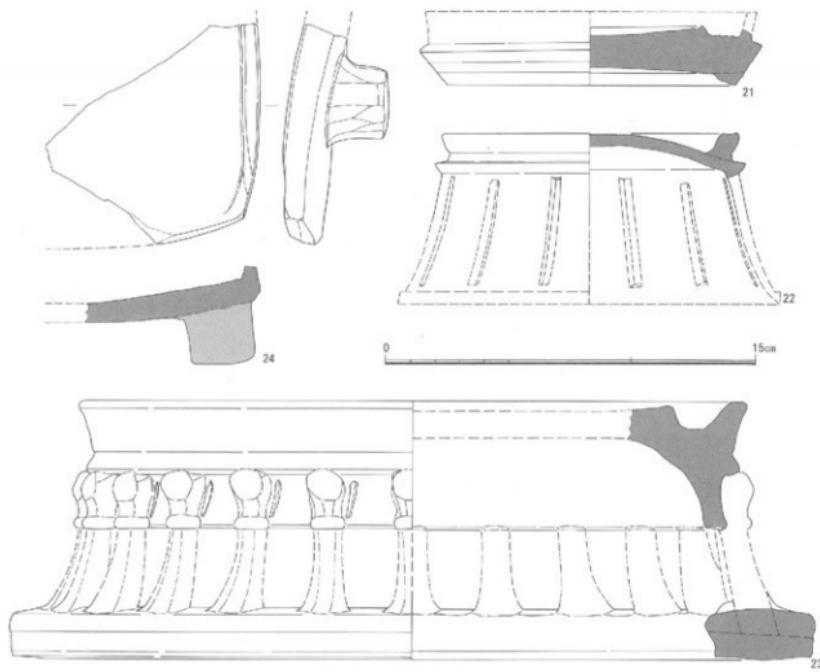


Fig.10 陶硯実測図 1:2

3 金属製品・土製品他

金属製品・土製品等の出土は少なく、主として土坑SK5645から出土した鋳造関係遺物の他は、掘立柱塀SA5641・5642の交点にあたる柱掘形から出土した鉄釘2本と銭貨があるにすぎない。

A 金属製品

鉄釘(PL.11-9, Fig.11) ほぼ同形同大的方頭釘で、2点とも先端を欠損する。1は、頭部径 $1.5 \times 1.5\text{cm}$ 、現存長 3.9cm 。脚部もほぼ方形で、基部径は $1.0 \times 1.1\text{cm}$ 。現存重量 7.8g 。2は、頭部径 $1.3 \times 1.4\text{cm}$ 、現存長 3.5cm 、脚部基部径 $1.0 \times 1.1\text{cm}$ 、現存重量 6.6g 。

銭貨(PL.11-1~8) 皇朝十二銭の最後、天德2年(958)初鋤の乾元大寶が、破片を含め8枚出土した。鋤上がりはよくなく、銭文も不明瞭なものが多い。直径は計測しうるもので、 $1.85 \sim 2.0\text{cm}$ 、重量は $1.85 \sim 2.55\text{g}$ とばらつきがある。

B 鋳造関係遺物(PL.11-13)

鋳造関係の遺物として炉壁・壁体合わせて約 3.4kg 、鉛滓約 0.7kg が出土した。この他、第46次調査区では、やや小型の轆羽口1点、土坑SK5645からは、大型の轆羽口片が出土している。炉壁・壁体の断片と共に大型の轆羽口の破片の存在から、いわゆる窓炉と呼ばれる大型溶解炉があったと推定される。轆羽口片や鉛滓等の蛍光X線分析の結果では、鉄と銅が顕著に検出され、また、鉛も含まれている。銅の製錬、あるいは鋤造と関係するものと考えられる。さらに、少量ではあるが、鋤型と考えられる破片もあるので、敷地内の一画で、大型の銅製品の鋤造が行われていたと推定される。

C 乾元大寶の材質

蛍光X線法による乾元大寶の非破壊分析の結果をTab.4に示す。これまでにも皇朝十二銭は、時代が下がるにつれて銀の量が減り、鉛が増える傾向にあることは指摘されていたが、鉛が90%を越える大変高い値を示した。材質確認のため、断片No.8の表面を削り、地金を表出し、微小部蛍光X線分析装置で分析すると、鉛約75%、銅約20%、砒素約2%、その他鉄、銀などが含まれていることがわかった。甲賀宣政の分析⁽¹⁾では、乾元大寶に含まれる鉛は、25~75%とかなりばらついている。当時の銭の材質は、完全に規格化されておらず、No.8の分析値もその一例である。この値が他の資料の成分を代表しているとは言いがたい。

(1) 甲賀宣政「古銭分析表」『考古学雑誌』第9卷第7号、1918年、PP.35~52。

Tab.4 乾元大寶の蛍光X線分析(非破壊法による)

試料No	Pb	As	Ag	Cu	Fe	Bi
No.1	95	1.4	0.61	3.0	0.51	
No.2	88	3.7	0.62	3.2	3.70	1.2
No.3	92	3.6	0.73	3.0	0.58	
No.4	94	2.0	0.66	3.2	0.46	
No.5	93	2.8	0.36	2.9	0.61	
No.6	93.	2.6	0.48	3.1	0.69	
No.7	93	2.4	0.69	2.8		
No.8	94	1.1	5.10		1.50	

試料No.8は小断片

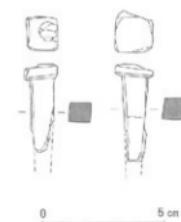


Fig.11 鉄釘実測図

IV 土器埋納遺構

1 出土状況 (Fig.12)

調査区東端南部で土器埋納遺構SX5670を検出した。これは、東端の排水溝にかかって須恵器皿Cで蓋をした須恵器壺Aが出土したもので、周辺を精査したところ、周間に小さな掘形があり、土器埋納遺構と判明した。掘形の大半は、調査当初に掘った排水溝と重複してしまっていたが、検出面からの深さは約40cmを測り、直径は約50cmに復原できる。須恵器壺Aは掘形の底から約3cm浮いた状態で出土し、掘形の埋土は、壺の底部より下は茶褐色粘土ブロック混り暗青灰砂、それ以上は茶褐色粘土ブロック混り暗青灰質土と、二層に分かれている。

須恵器壺A内には、墨挺、筆管、銅刀子が埋納されており、このことから、埋納遺構出土の土器は胞衣壺であると考えられるにいたった。後述しているように、須恵器壺A内の5カ所、掘形内外の3カ所の土壤を採取し、脂肪酸分析を行なった結果も、この推定を裏付けるものである。詳細な分析結果についてはIV-3を参照されたい。

この土器埋納遺構SX5670の年代は、須恵器壺Aの形態から、奈良時代前半に位置づけられる。出土位置は、SX5670はSB5631とSB5637のちょうど中間にあたり、両建物と何らかの関係を持つ可能性もある。

なお、平城京内の胞衣壺は、須恵器壺Aに墨挺、筆管、和同開珎4枚を埋納した右京五条四坊三坪例⁽¹⁾をはじめ、左京五条五坊十坪例⁽²⁾（須恵器壺A）、右京八条一坊十四坪例⁽³⁾（須恵器杯B）など、和同開珎を納めることが多いが、本例は錢貨を欠き、銅刀子を持つことで注目される。

2 出土遺物

A 土 器 (Fig.13-1・2)

1は須恵器皿Cで、反転させて蓋として用いていたもの。約1/3を欠失する。灰褐色を呈する1群土器で、口縁端部に平坦な面取りを行なう。底部はヘラ切りのままで、口縁部内外面をロクロナデ、底部内面を一定方向のナデで調整する。

2は須恵器壺A。口縁部は土圧により内部に落ち込んでいたが、口縁端部の一部を欠失する以外は完形である。肩が体部上半で強く張る器形で、和銅年間の紀年木簡を共伴し、平城宮土器Iに属する平城宮東院の斜行溝SD8600⁽⁴⁾や、靈龜年間の木簡を共伴し、平城宮土器IIに属する左京三条二坊八坪（長屋王邸）の溝SD4750⁽⁵⁾（長屋王家木簡出土溝）から出土した壺Aと類似した形態で、奈良時代前半のものと考えられる。胴部下半はロクロ削りを行なった上にロクロナデを施し、それ以外はロクロナデで調整する。青灰色を呈し、焼成の堅緻な1群土器で、胴部上半には

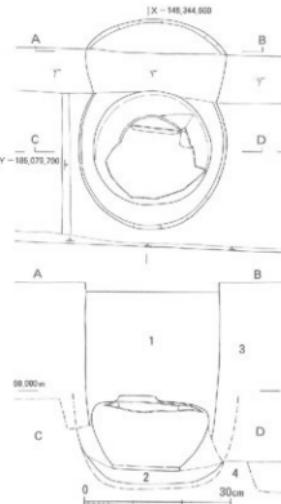


Fig.12 胞衣壺出土状態

- 1：茶褐色粘土ブロック混暗灰質土
- 2：灰黒粘土ブロック混暗青灰砂
- 3：暗褐色砂質粘土
- 4：青灰砂

黄灰緑色の自然釉が厚く降着する。蓋を重ねて焼いた痕跡があり、胴部には火ぶくれが見られる。また、肩部には他の個体の破片が融着している。

B 埋納品 (PL. Fig.13-3~5)

墨挺 截頭舟形のいわゆる唐墨形をしている。未使用である右京五条四坊三坪出土例と比較すると、かなり使用したものであることがわかる。平城京では、他に和同開珎5枚とともに胞衣壺に納められていた右京八条一坊十四坪出土例と左京三条二坊十六坪出土例^(*)があり、本例が4例目である。現存長2.6cm、幅2.6cm、厚さ1.1cm。重量4.62g。

筆管 遺存状態がよくないため、明確ではないが、恐らく、一端近くに節をもつ竹管と思われる。穂先を失い、筆管の半分以上が押しつぶされたようになっており、残りの部分も土圧等により変形している。現存長11.6cmで、直径は1.2cm前後に復原できる。

銅刀子 錫造によって刀身と茎を造りだした銅製の刀子。通常の刀子と異なって、刀身部に比し茎部が太くて長い形態をしている。柄などの木質部は遺存しておらず、あるいは、当初から木柄等がなく、メスのような用い方をしたのではないかと思われる。刃先の一部を欠失しており、現存長13.0cm、刃部は現存長2.9cm、棟の厚さ0.3cm。茎の断面は楕円形を呈し、幅0.7cm、厚0.5cmである。重量21.65g。蛍光X線分析の結果は、銅がほぼ98%で、微量成分として、砒素、銀等が含まれる。

- (1) 佐藤興治「蔵骨器と副葬遺物」『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』1977年、pp.12~13。
- (2) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和63年度』1989年、p. 2。
- (3) 松村恵司「土器埋納遺構出土遺物」『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第46冊、1989年、p.138。
- (4) 奈良国立文化財研究所『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1978年、pp. 9~18。
- (5) 奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊・長屋王邸・藤原麻呂邸・発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第54冊、近刊予定。
- (6) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』1992年、p. 81。

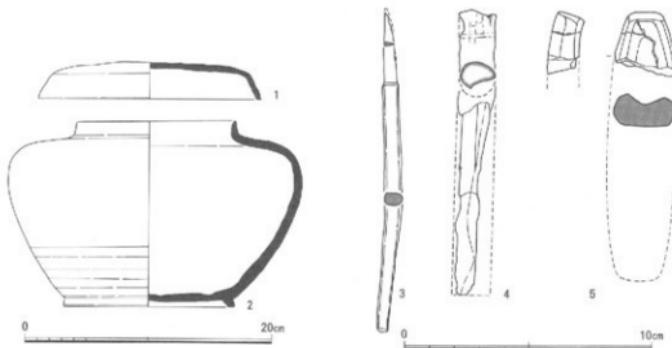


Fig.13 胞衣壺・埋納品実測図

3 平城京左京三条一坊十四坪から出土した

土器に残存する脂肪の分析

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと¹⁾、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子²⁾、約5千年前のハーゼルナット種子³⁾に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した⁴⁾。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量とともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに伸びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて平城京左京三条一坊十四坪から出土した土器の性格を解明しようとした。

A 土壤試料

奈良県平城京左京三条一坊十四坪から出土した径約24cmの土器内外の土壤試料を分析した。土器内外での土壤試料採取地点をFig.14に示す。試料No.1～No.3は土器内のもので、No.1は上層部、No.2は中層部、No.3は下層部から、No.4～No.6は土器外のもので、No.4は土器が埋まっていた坑より外、No.5は坑内の上器底部直下、No.6は坑内の土器側面から、それぞれ採取した。

B 残存脂肪の抽出

土壤試料25～108gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮し

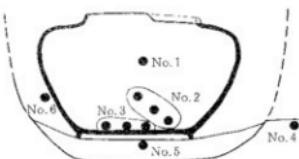


Fig.14 土壤試料採取地点

て残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を Tab. 5 に示す。抽出率は 0.0007% ~ 0.0561%、平均 0.0132% であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壤、石器、土器等の試料の平均抽出率 0.0010% ~ 0.0100% より若干高いものであった。また、土器内底部試料 No. 3 の抽出率は 0.0561% と大変高く、土器外坑外試料 No. 4 のそれは 0.0007% と大変低いものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

Tab. 5 土壤試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点	湿重量 (g)	全脂質 (mg)	抽出率 (%)
1	土器内 A	25.4	1.4	0.0055
2	土器内 B、C、D	40.9	3.9	0.0095
3	土器内 E、F、G	94.8	53.2	0.0561
4	土器外①	60.1	0.4	0.0007
5	土器外②	57.7	1.9	0.0033
6	土器外③	107.9	4.3	0.0040

C 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に 5% メタノール性塩酸を加え、125°C 封管中で 2 時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチル化してから、ヘキサン-エチルエーテル-酢酸 (80:30:1) またはヘキサン-エーテル (85:15) を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した⁽⁶⁾。

残存脂肪の脂肪酸組成を Fig. 15 に示す。残存脂肪から 9 種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸 (C16:0)、ステアリン酸 (C18:0)、オレイン酸 (C18:1)、リノール酸 (C18:2)、アラキジン酸 (C20:0)、エイコサモノエン酸 (C20:1)、ベヘン酸 (C22:0)、リグノセリン酸 (C24:0) の 8 種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

各試料中の脂肪酸組成パターンを見てみると、土器内外でパターンに違いがあった。土器内試料では試料 No. 2 と No. 3 が同一傾向を示した。このうち炭素数 18 までの中級脂肪酸の分布割合について見てみると、すべての試料中で主要な脂肪酸はパルミチン酸で約 34~44% 分布していた。次いでステアリン酸、オレイン酸の順に多いものと、オレイン酸、ステアリン酸の順に多いものがあった。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸が生成するためで、主として植物遺体の土壤化に伴う腐植物から来ていると推定される。ステアリン酸は動物性脂肪や植物の根に比較的多く分布している。また、オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物脂肪の方が分布割合は高い。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計含有率が土器内試料No.3で約50%、土器外坑外試料No.4で約15%、他のすべての試料中で約20~36%であった。通常の遺跡出土土壤中のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級脂肪酸3つの含有率は約4~10%であるから、すべての試料中での高級脂肪酸含有量は多いといえる。特に、上器内試料No.2、No.3には非常に多く含まれていた。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成成分として含まれている場合がある。

以上、平城京左京三条一坊十四坪の試料には土器内外で脂肪酸組成パターンに違いがあること、すべての試料中で主要な脂肪酸はバルミチン酸であることがわかった。また、高級脂肪酸含有量もすべての試料中で多く、特に上器内中層部、下層部試料中で非常に多いことがわかった。

D 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ビリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてから、もう一度同じ展開溶媒で精製し、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成をFig.16に示す。残存脂肪から20種類前後のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シットステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは上器内試料No.2とNo.3に約31~55%、他のすべての試料中に約14~20%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2~6%分布している。従って、すべての試料中でのコレステロール含有量は多く、特に土器内試料No.2、No.3のそれは非常に多かった。

植物由来のシットステロールは土器内試料に約6~11%、土器外試料に約18~36%分布していた。通常の遺跡出土土壤中にはシットステロールは30~40%、もしくはそれ以上に分布している。従って、すべての試料中でのシットステロール含有量は少なめであるが、特に土器内試料中では少なかつた。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、カンペステロールが土器外試料No.4で検出されず、他のすべての試料中に約1~3%、スチグマステロールがす

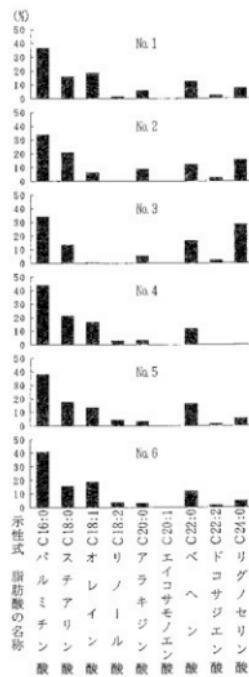


Fig.15 試料中に残存する
脂肪の脂肪酸組成

Tab. 6 試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	15.25	10.58	1.44
2	31.44	6.92	4.54
3	54.72	6.42	8.52
4	20.25	36.42	0.56
5	13.75	20.37	0.68
6	16.86	17.73	0.95

べての試料中に約2~10%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1~10%分布している。従って、試料中に含まれているカンペステロール、スチグマステロールは通常の遺跡出土土壌並みであった。

微生物由来のエルゴステロールは土器外試料No.4で検出されず、他のすべての試料中に0.1~0.8%分布していた。これは土壌微生物の存在による結果と思われる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、土器内試料に約2~9%分布し、土器外試料からは検出されなかった。特に、土器内試料No.2とNo.3にはコプロスタノールは多く分布していた。通常コプロスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合があるが⁽⁶⁾、今回も含まれていても10%以下の量であるため、それらの判定はできなかった。しかし、コプロスタノールが含まれているということは、試料No.2、No.3には哺乳動物の腸および糞便由来の脂肪が残存していることを示唆している。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上⁽⁷⁾、土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる^(8,9)。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比をTab. 6に示す。表からわかるように、分布比は土器内試料で約1.4~8.5と非常に高く、土器外試料では約0.6~1.0と、0.6以上ではあるが低めの値であった。この分布比からも土器の内外で試料が異なる傾向を示すことがわかる。従って、土器内試料には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が多く残存していることを示唆している。

以上、平城京左京三条一坊十四坪の試料にはコレステロールが多く含まれており、特に上器内中層、下層試料に多いこと、コプロスタノールも土器内中層、下層試料に多いことや、他の各種ステロール類はすべて通常の遺跡中の植物腐植土並みか、それよりも少なめであることがわかった。また、コレステロールとシトステロールの分布比はすべての試料中に動物遺体または動物由来の脂肪が残存し

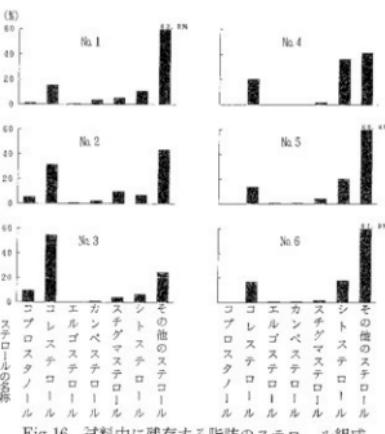


Fig.16 試料中に残存する脂肪のステロール組成

ていることを示しており、特に土器内試料中にはそれらが非常に多く含まれている可能性があることがわかった。

E 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に出土土器を陶衣壺と判定した奈良県平城京左京（外京）五条五坊十坪⁽¹²⁾、平城京右京三条二坊十五坪⁽¹³⁾、平城京左京三条二坊十六坪⁽¹²⁾、平城京右京三条三坊二坪⁽¹³⁾、平城京左京五条一坊十一坪⁽¹⁴⁾、西隆寺跡⁽¹⁵⁾、京都府長岡京右京五条二坊十五町⁽¹⁶⁾、岡山県津寺遺跡⁽¹⁷⁾、ヒトの胎盤、山上土壤を土壌墓と判定した兵庫県寺田遺跡⁽¹⁸⁾、出土土器を幼児埋葬用斐棺と判定した静岡県原川遺跡⁽¹⁹⁾、ヒトの体脂肪、山上土壤を再墓と判定した宮城県摺萩遺跡⁽²⁰⁾、ヒトの骨油、ニワトリ、ブタの油の付着状況を調べた解体川石器試料など、これまでに集積された遺跡試料および現生試料の脂肪酸の類似度とも比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのがFig.17である。

図からわかるように、平城京左京三条一坊十四坪の試料No.1、No.4～No.6は平城京左京（外京）五条五坊十坪、長岡京右京五条二坊十五町、平城京右京三条二坊十五坪、ヒトの胎盤試料と共に相関行列距離0.1以内でA群を形成し、よく類似していた。平城京左京一坊十四坪の試料No.2は平城京左京五条一坊十三坪、平城京左京三条二坊十六坪、長岡京右京五条二坊十五町の試料と共に相関行列距離0.1以内でB群を形成し、よく類似していた。平城京左京三条一坊十四坪の

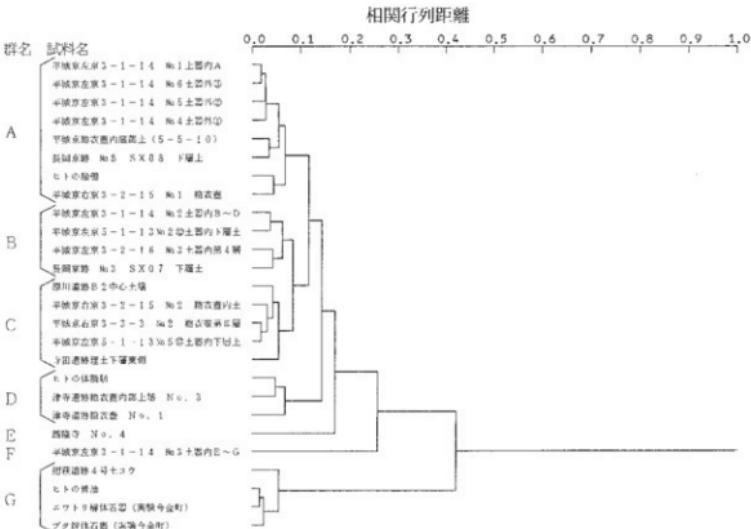


Fig.17 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

試料No.3は単独でF群を形成した。他の対照試料はC、D、E、G群を形成した。これらの群のうちA～E群は相関行列距離0.2以内の所にあり類似しているといえる。平城京左京三条一坊十四坪の土器内下層試料No.3は他のA～E群の試料とは傾向をやや異にしてはいるが、樹状図全体からすれば同じ系統樹に属すといえる。ヒトの骨に関わる試料や解体石器試料は単独でG群を形成したが、G群は他のA～F群とは類似していなかった。

以上、平城京左京三条一坊十四坪の上器内外の試料は上器内下層試料No.3が若干傾向を異にしてはいるが、すべて胞衣壺と判定した試料、ヒトの胎盤試料、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料、ヒトの体脂肪試料と類似していることがわかった。

F 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するためには、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

土壤試料の残存脂肪から求めた相関図をFig.18に示す。図からわかるように、試料No.1、No.4、No.5、No.6は第2象限内の原点に近い位置でA群を、No.2は第1象限内の原点に近い位置でB群を、No.3は第1象限内の原点から遠く離れた位置でF群を形成した。これらの分布位置は試料中に残存している脂肪が高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分や体脂肪、骨油に由来することを示唆している。

G 酵素抗体法（ELISA法）による糖脂質の認定

哺乳動物赤血球膜は、特異な糖脂質群（古代ガングリオシド、古代ヘマトシド）で構成されている。Tab.7に見られるように、主要な糖脂質の化学構造、特に、糖鎖構造は動物種ごとに異なる。また、Tab.8に見られるように、ヒト赤血球膜には糖鎖構造の異なる糖脂質がいくつもある。この糖鎖の違いを抗原抗体反応によって読み取り、動物種を認定することができる。この反応の測定には抗体に特異な酵素を標識した酵素抗体法（Enzyme-Linked Immunosorbent Assay: ELISA法）を用いた^[31]。

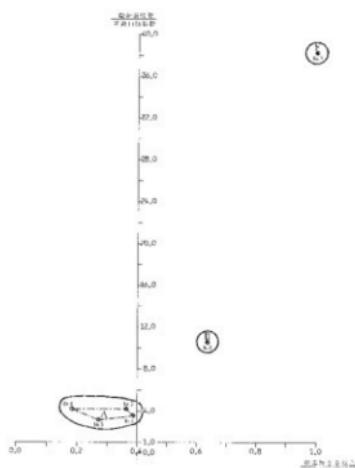


Fig.18 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

Tab. 7 哺乳動物赤血球の主要糖脂質の化学構造

GalNAc β 1-3Gal α 1-4Gal β 1-4Glc β 1-1Cer	ヒト、ブタ
GalNAc β 1 4Gal β 1-4Glc β 1-1Cer	モルモット
GalNAc α 1-3GalNAc β 1-3Gal α 1-4Gal β 1-4Glc β 1-1Cer	ヤギ、ヒツジ
Gal α 1-3Gal β 1-3GlcNAc β 1-3Gal β 1-4Glc β 1-1Cer	ウサギ
NeuNGc α 2-3Gal β 1-4Glc β 1-1Cer	ウマ
NeuNAc α 2-3Gal β 1-4Glc β 1-1Cer	イヌ
NeuNGc α 2-8NeuNGc α 2-3Gal β 1-4Glc β 1-1Cer	ネコ

Cer: セラミド、Gal: ガラクトース、Glc: グルコース、GalNAc: N-アセチルガラクトサミン

GlcNAc: N-アセチルグルコサミン、NeuNAc: N-アセチルノイロイミン酸、

NeuNGc: N-グリコリルノイロイミン酸

Tab. 8 ヒト赤血球膜の糖脂質群

GM ₁	: Gal β 1-3GalNAc β 1 > $\frac{4}{3}$ NeuNAc α 2	Gal β 1-4Gal β 1-1Cer
アシアロ GM ₁	: Gal β 1 3GalNAc β 1-4Gal β 1-4Glc β 1-1Cer	
アシアロ GM ₂	: GalNAc β 1-4Gal β 1-4Glc β 1-1Cer	
フォルスマン	: GalNAc α 1-3GalNAc β 1-3Gal α 1-4Gal β 1-4Glc α 1-1Cer	
血液A型物質	: GalNAc α 1-3Gal β 1-3GlcNAc β 1-3Gal β 1-4Glc β 1-1Cer	
血液B型物質	: Gal α 1 > $\frac{3}{2}$ Fuc α 1 Gal β 1-3GlcNAc β 1-3Gal β 1-4Glc β 1-1Cer	

Cer: セラミド、Gal: ガラクトース、Glc: グルコース、GalNAc: N-アセチルガラクトサミン、

GlcNAc: N-アセチルグルコサミン、Fuc: フコース、NeuNAc: N-アセチルノイロイミン酸

試料のうち高級脂肪酸含有量、コレステロール含有量が多い上器内中層、下層試料No.2、No.3と対照試料として坑外試料No.4を用いて抗原抗体反応を行った。クロロホルム-メタノール混合溶媒で抽出・分離したクロロホルム層と Folch 水層を0.1N メタノール性苛性ソーダを用いてアルカリ処理し、グリセロリン脂質などのエスチル化合物を除去する。得られたアルカリ安定脂質の糖脂質からケイ酸カラムクロマトグラフィーおよび陰イオン交換体のDEAE-セファデックS A-25カラムクロマトグラフィーにより、古代ガングリオシドを分画・精製した。このものを抗原としてポリプロピレン製のマイクロタイタープレートウェルの内面に固着させ、ウサギ由来のポリクロナール抗体の抗GM₁、抗アシアロGM₁、抗アシアロGM₂、抗フォルスマン、モノクロナール抗体の抗血液A型物質、抗血液B型物質と反応させた。未結合抗体を除去後、二次抗体としてペルオキシダーゼ標識抗免疫グロブリン抗体(抗ウサギIgG)と反応させる。未結合標識抗体を除去後、発色基質の5-アミノサリチル酸と過酸化水素で発色させてからマイクロプレート光度計で490nm の吸光度を測定した。

ELISA法による抗GM₁、抗フォルスマン、次に抗アシアロGM₁、抗アシアロGM₂に対する反応吸光曲線をFig.19・20に示す。図からわかるように、試料中のヒトの胎盤、脳、血液に由来する古代ガングリオシドのGM₁分布を調べた。抗GM₁に対する抗体反応による吸光は試料No.3で認められ、GM₁が検出された。ヒトの脳や神経組織に多く分布するアシアロGM₁およびアシアロGM₂に対しては抗体反応による吸光は認められず、アシアロGM₁およびアシアロGM₂は検出されなかった。また、ヒトの血清に分布するフォルスマンについては、抗フォルスマンに対する抗体反応による吸光は試料No.3で微量ではあるが認められた。このフォルスマン軸鎖

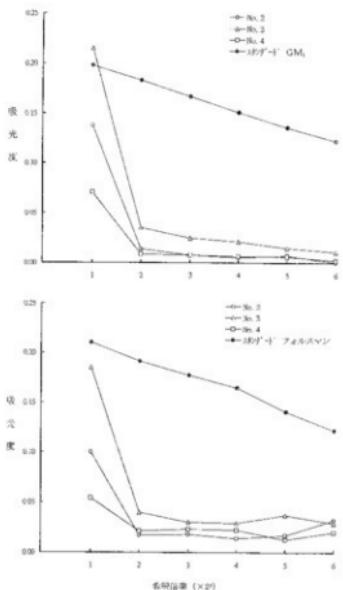


Fig.19 試料中に残存する糖脂質GM₁、
フォルスマンの酵素抗体反応

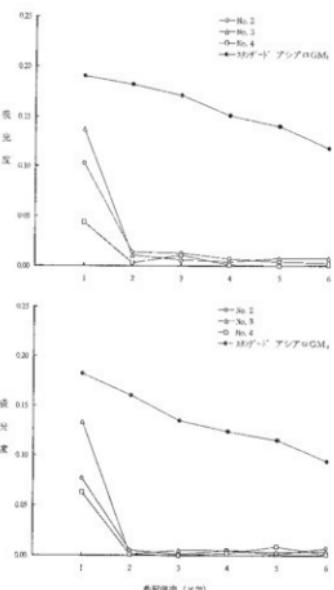


Fig.20 試料中に残存する糖脂質アシアロGM₁、
アシアロGM₂の酵素抗体反応

Tab. 9 土器に残存する血液型糖脂質群の酵素抗体反応による認定

試料No.	抗GM ₁	抗アシアロGM ₁	抗アシアロGM ₂	抗フォルスマン	抗A型	抗B型	血液型
2	-	-	-	-	+	(±)	A
3	+	-	-	+	+	(±)	A
4	-	-	-	-	-	-	-

+ : ベルオキシダーゼ標識酵素反応陽性

- : ベルオキシダーゼ標識酵素反応陰性

± : ベルオキシダーゼ標識酵素反応微弱性

の末端GalNAcは血液A型物質の末端を構成するので、試料をA型抗体と反応させた。Fig.21からわかるように、A型抗体と直接反応させると試料No.2とNo.3で血液A型物質が検出された。同様に血液B型抗体とも反応させると、極微量ではあるがB型抗体を認識したが、A型抗体と比較して反応は低かった。この抗原抗体反応の結果をまとめたのがTab.9である。従って、土器内には下層部分にヒトのA型血液を含む物質が存在していたと推測される。土器外の坑外試料No.4はいずれの抗体とも反応を示さなかった。ELISA法は糖脂質が $5 \times 10^{-8} g$ 分布していても、それを検出できる超微量分析法である。従って、土器外の対照試料は各糖脂質抗体と反応せず、土器外に糖脂質群が分布しないことを認識できたことになる。土器外にも高級脂肪酸やコレステ

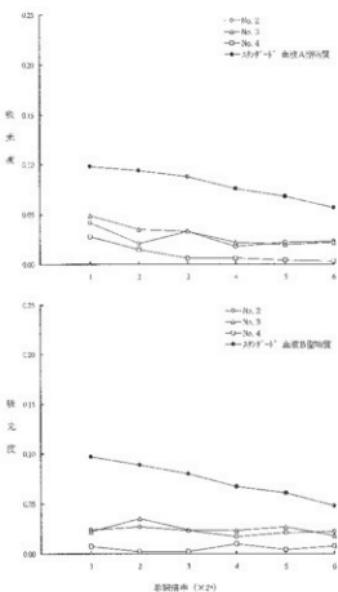


Fig.21 試料中に残存する糖脂質血液A型物質、B型物質の酵素抗体反応

ロールが存在していたが、土器内試料とは性質の異なる動物脂肪が混在していたと推測される。

以上、平城京左京三条一坊十四坪の土器内試料中に含まれている糖脂質群からは、GM1やフルスマン、微量ではあるがヒト血液A型物質を認識したことから、土器内にはヒトの胎盤、脳、血液に由来する脂肪が残存していたと認定された。

H 総括

平城京左京三条一坊十四坪から出土した土器の性格を判定するために、土器内外の土壤試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、試料中の主要な脂肪酸はパルミチン酸であるが、土器の内外で脂肪酸組成パターンに違いがあることがわかった。また、高級脂肪酸含有量もすべての試料中で多いが、特に上器内中層部、下層部試料中で非常に多いこともわかった。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、クラスター分析からは、試料中に残存している脂肪が、土器内下層試料No.3が若干傾向を異にしているが、すべて胞衣壺、ヒトの胎盤、ヒト遺体の直接埋葬試料に残存している脂肪と類似していることがわかった。種特異性相関からは試料中に残存している脂肪が、高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分や体脂肪、骨油に由来することがわかった。

残存するステロール分析の結果、試料中にはコレステロールが多く含まれており、特に土器内中層、下層試料に多いこと、コプロスタノールも土器内中層、下層試料に多いことや、他の各種ステロール類はすべて通常の遺跡中の植物腐植土並みか、それよりも少なめであることがわかった。また、コレステロールとシスステロールの分布比からはすべての試料中に動物遺体または動物由来の脂肪が残存していたが、特に土器内試料中に多く残存していることがわかった。

酵素抗体法を用いた糖脂質群によるヒトおよびヒト関連物質の認定の結果、抗GM1、抗フルスマンには土器内下層試料No.3が、血液A型抗体には土器内中層試料No.2と下層試料No.3が反応し、血液B型抗体には土器内中層試料No.2と下層試料No.3がごくわずかに反応を示したが、血液A型抗体に比べて反応は低かった。従って、土器内にはA型血液を含む物質が存在していたと推測される。

以上の成績から、平城京左京三条一坊十四坪から出土した土器には胞衣壺、ヒトの胎盤、ヒト遺体の直接埋葬試料に残存している脂肪と類似の脂肪で、かつA型血液を含む物質の脂肪が残存している可能性が強い。土器の径が約24cmであることを考え合わせると、A型血液のヒトの胎盤が納められていた可能性が推測される。

- (1) R.C.A.Rottländer and H.Schlüchterle 「Food identification of samples from archaeological sites」『Archaeo Physika』10巻、1979年、pp.260–267。
- (2) D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」『Nature』292巻、1981年、pp.146–148。
- (3) R.C.A.Rottländer and H.Schlüchterle 「Analyse frühgeschichtlicher Gefäßinhalte」『Naturwissenschaften』70巻、1983年、pp.33–38。
- (4) 中野益男「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』第10巻(6)、1984年、pp.124–133。
- (5) M.Nakano and W.Fischer 「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」『Hoppo–Seyler's Z.Physiol.Chem.』358巻、1977年、pp.1439–1453。
- (6) 中野益男「残存脂肪酸による古代復元」『講演収録集－新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』1989年、pp.114–131。
- (7) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教博、畠 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 琢「古代遺跡に残存する脂質の分析」『脂質生物学研究』第26巻、1984年、pp.40–43。
- (8) 中野益男「真駒遺跡出土土器に残存する動物油脂」『真駒遺跡－農村基盤総合設備事業能都東地区真駒工区に係わる発掘調査報告書』1986年、pp.401–406。
- (9) 中野益男、根岸 孝、長田正宏、福島道広、中野寛子「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」『ヘロカルウス遺跡』北海道文化財研究所調査報告書第3集、1987年、pp.191–198。
- (10) 中野益男、中岡利泰、福島道広、中野寛子、長田正宏「平城京左京(外京)五条五坊十坪から出土した胞衣壺の残存脂質について」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和63年度』1989年、pp.5–14。
- (11) 中野益男、中野寛子、明瀬雅子「平城京右京二条二坊十五坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』1992年、pp.38–43。
- (12) 中野益男、中野寛子、明瀬雅子、長田正宏「平城京左京二条二坊十六坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』1993年、pp.93–97。
- (13) 中野益男、中野寛子、明瀬雅子、長田正宏「平城京右京二条三坊三坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』1994年、pp.54–60。
- (14) 中野益男、中野寛子、明瀬雅子、長田正宏「平城京左京五条一坊十三坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」(未発表、奈良市教育委員会より刊行予定)。
- (15) 中野益男、福島道広、中野寛子、明瀬雅子、長田正宏「西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」『西隆寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所創立四十周年記念学報第52冊、1993年、pp.94–100。
- (16) 中野益男、中野寛子、明瀬雅子、長田正宏「長岡京右京五条二坊十五町から出土した土師器壺に残存する脂肪の分析」(未発表、長岡京市埋蔵文化財センターより刊行予定)。
- (17) 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男、福島道広「津寺遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」(未発表、岡山県古代吉備文化財センターより刊行予定)。
- (18) 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏「寺田遺跡土壇墓状遺構に残存する脂肪の分析」(未発表、芦屋市教育委員会より刊行予定)。
- (19) 中野益男、幅口 剛、福島道広、中野寛子、長田正宏「原川遺跡の土器壺に残存する脂肪の分析」『原川遺跡I－昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』第17集、1988年、pp.79–90。
- (20) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」(未発表、宮城県教育委員会より刊行予定)。
- (21) 内貴正治、佐内 豊、岩森正男、滝 孝雄、鈴木明身、楠 進「免疫科学的手法」『統生化学実験講座・複合糖質研究法II』第4巻、1986年、pp.95–130。

V 考 察

1 条坊の復元

今回の報告対象である左京三条一坊十四坪は、東が東一坊大路、西が東一坊坊間東小路に面し、北を三条条間路、南を一条条間南小路によって囲まれる。これらの道路については、いずれも過去に発掘調査を行っているので、その成果に基づき、当該坪四周の条坊を復元しておこう。

作業にあたっては、データの解析と統計的な処理を容易にするために、各条坊道路の路心や側溝心を、X・Yの一次関数で表すこととする。そして、三箇所以上の遺構データが存在するものについては、回帰分析により、直線の傾きと切片の最確値を計算する方式を採用した。ただし、データが二箇所でしか得られていない場合は、たんにそれぞれを結ぶ直線を求めるものとする。計算の結果は、Tab.1に示すとおりである。

令大尺と令小尺 記述を進めるにあたり、まず尺度について整理しておきたい。奈良時代の尺度には、大宝令に定める大尺と小尺の二種類があり、平城京の条坊の設定は、基本的に令大尺を用いて行われている⁽¹⁾。令小尺は、1尺=約0.30mの唐大尺、令大尺はその1.2倍の、いわゆる高麗尺とみるのが通説であり、本書もその立場をとる。ところが、一方で、令大尺=唐大尺とし、令小尺を、1尺=約0.25mの唐小尺とみる説も、古くから存在する。さらに近年では、高麗尺そのものを否定する見解も提示されるにいたった⁽²⁾。しかし、以下の理由から、少なくとも令大尺・令小尺が、それぞれ唐大尺・唐小尺に対応するという考えは、成り立たないと思う。

大宝令の雜令には、「一尺二寸を、大尺の一尺と為よ」「凡そ地度り、銀、銅、穀量らむは、皆大を用ゐよ。此の外は、官私悉くに小なる者を用ゐよ」「凡そ地度らむことは、五尺を歩と為よ」の規定がある。これは和銅六年(713)二月十九日に改定され(『続日本紀』和銅六年二月壬子条)、令集解田令長条に引く同日の格では、「其地を度るに六尺を以て歩と為よ」と規定された。つまり、和銅六年のこの時点で、従前の度地尺としての令大尺の使用が廃され、度地尺を含めて、全てが令小尺に統一されたわけである。

一方、平城宮・平城京などの奈良時代の現存建築や発掘遺構をみると、唐小尺が使用された形跡はなく、いずれも、いわゆる天平尺である唐大尺を用いている。また、条坊や地割など、度地にかかわる部分では、奈良時代当初は、唐大尺の1.2倍にあたる尺度(いわゆる高麗尺)か、またはその5倍(唐大尺の6倍)にあたる「歩」を使用し、以後、唐大尺そのものが使われたことがわかっている。これは、上記の大宝令の規定やその改定状況とよく対応するものであり、それらが空文ではなく、実際に遵守されたことは疑いない。同時に、令小尺=唐大尺とみて、はじめて理解できるものである。

つまり、令大尺が度地尺として短期間使用されたのを除けば、奈良時代に普遍的に用いられたのは令小尺であるが、それが唐大尺であったことは明白である。令小尺=唐小尺とみるためには、大宝令や和銅六年の格の実効性を完全に否定し、令大尺が全てにわたって用いられたと認定しうるだけの根拠を明示するか、建築をはじめとする奈良時代の遺構に関して、唐小尺の使用を立証しなければならない。和銅六年の度量衡改定がなぜ行われたのか、という点についても、明快な説明が必要である。当該時期の遺構についての資料の蓄積と研究が進行した現在にあっては、不可能と言わざるをえないであろう。以下では、令小尺=唐大尺として記述する。

Tab.10 開通条坊座標一覧表

点	条	坊	種別	X座標	Y座標	調査次数	文献	座標値の典拠
1	東一坊大路	東側溝心	-145,763.24	-18,043.13	奈文研 39次	a	文献P p.88	
2	東一坊大路	東側溝心	-146,039.54	-18,041.48	奈文研 32次	b	文献P p.88	
3	東一坊大路	東側溝心	-148,177.50	-18,030.50	奈文研 252次		大測図	
4	東一坊大路	道路心	-145,729.60	-18,054.90	奈文研 39次	a	文献9 p.66	
5	東一坊大路	道路心	-145,754.77	-18,054.91	奈文研 39次	a	大測図	
6	東一坊大路	道路心	-146,030.42	-18,053.43	奈文研 32次	b	大測図	
7	東一坊大路	道路心	-148,177.30	-18,041.65	奈文研 252次		実測図	
8	東一坊大路	西側溝心	-145,746.29	-18,066.69	奈文研 39次	a	実測図	
9	東一坊大路	西側溝心	-146,021.29	-18,065.37	奈文研 32次	b	実測図	
10	東一坊大路	西側溝心	-146,122.00	-18,064.45	奈文研 234-9次	c	実測図	
11	東一坊大路	西側溝心	-146,208.00	-18,064.00	奈文研 118-8次	d	文献P p.195	
12	東一坊大路	西側溝心	-148,177.10	-18,052.80	奈文研 252次		大測図	
13	東一坊間東小路	東側溝心	-146,215.00	-18,182.35	奈文研 230次	e	文献e p.65	
14	東一坊間東小路	東側溝心	-146,342.00	-18,182.00	奈文研 46次	f	文献f p.49	
15	東一坊間東小路	東側溝心	-147,795.00	-18,175.88	奈良市 139次		本書	
16	東一坊間東小路	道路心	-146,215.00	-18,185.88	奈文研 230次	e	文献e p.65	
17	東一坊間東小路	道路心	-147,795.00	-18,179.11	奈良市 139次	f	文献f p.49	
18	東一坊間東小路	西側溝心	-146,096.00	-18,190.20	奈文研 242-9次	g	文献g p.74	
19	東一坊間東小路	内側溝心	-146,215.00	-18,189.40	奈文研 230次	e	文献e p.65	
20	東一坊間東小路	西側溝心	-147,795.00	-18,182.35	奈良市 139次	f	文献f p.49	
21	三条条間路	北側溝心	-146,283.43	-19,740.00	奈良市 196-4次	h	文献h p.17	
22	三条条間路	道路心	-146,287.84	-19,745.35	奈良市 236-2次	i	文献i p.6	
23	三条条間路	南側溝心	-146,292.25	-19,750.70	奈良市 236-2次	i	文献i p.6より	
24	三条条間南小路	北側溝心	-146,413.33	-17,991.40	奈文研 174-10次	j	実測図	
25	三条条間南小路	北側溝心	-146,410.25	-19,837.00	奈文研 162次	k	実測図	
26	三条条間南小路	道路心	-146,416.88	-17,991.40	奈文研 174-10次	j	文献j p.60	
27	三条条間南小路	道路心	-146,415.30	-19,837.00	奈文研 162次	k	実測図	
28	三条条間南小路	南側溝心	-146,416.10	-16,370.00	奈良市 84次	l	文献n p.51	
29	三条条間南小路	南側溝心	-146,416.13	-16,430.00	奈良市 54次	m	文献s p.127	
30	三条条間南小路	南側溝心	-146,417.05	-16,626.20	細考研 985061	n	文献n p.51	
31	三条条間南小路	南側溝心	-146,417.92	-16,879.00	奈文研 151-18次	o	文献s p.127	
32	三条条間南小路	南側溝心	-146,420.43	-17,991.40	奈文研 174-10次	j	文献n p.51	
33	三条条間南小路	南側溝心	-146,420.35	-19,837.00	奈文研 162次	k	実測図	

文献

- a 猪熊兼勝・森都大「第39回調査 東面山門推定地東側」『奈良國立文化財研究所年報1967』1967年 pp.42-45
- b 石井利孝・三輪嘉六「第32回調査 宮城東南隅」『奈良國立文化財研究所年報1966』1966年 pp.36-39
- c 杉山洋「東一坊人路西側溝の調査」第234-9次「1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」1993年 p.73
- d 井上和人「左京三条一坊五坪の調査」(第118 8次)「昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」1980年 pp.25-26
- e 小野健吉「左京三条一坊十・十五・十六坪の調査」第230次「1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」1993年 pp.57-66
- f 鐘方正樹「平城京左京六条一坊十・十五坪坪境小路の調査」第139次「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度」1988年 p.49
- g 小池伸吉「左京三条一坊九・十六坪(境)の調査」第242-9次「1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」1994年 p.74
- h 中井公・川越邦江「平城京右京二条二坊二坪の調査」第196-4・5次、第213 4次「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度」1991年 pp.17-18
- i 西崎卓哉・池田裕美はく「平城京右京三条二坊三坪・音原東遺跡の調査」第236・236-2次「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度」1993年 pp.4-15
- j 小林謙一「左京三条二坊三・四坪の調査」第174 10次「昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」1987年 pp.58-60
- k 西堀海「右京三条二坊四・五・八坪の調査」第162次「昭和59年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」1985年 pp.63-64
- l 西崎卓哉「平城京左京(外京)三条五坊四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』1985年 pp.93-94
- m 中井公・森下恵介はく「平城京左京一条五坊四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』1984年 pp.23-27
- n 奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京三条四坊十二坪発掘調査報告書」1987年
- o 橋本義則「左京三条四坊四坪の調査」第151-18次「昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」1984年 p.43
- p 小沢義「左京二条一坊四坪の調査」第215-16次「1990年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」1991年 pp.81-91
- q 小沢義「平城宮子門の山陰町」『奈良國立文化財研究所年報1994』1994年 pp.66-67
- r 奈良國立文化財研究所「奈良國立文化財研究所二十年史」1982年
- s 西崎卓哉「平城京左京一条四坊十坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』1985年 pp.124-128

Tab.11 条坊遺構の関数化

条 坊 遺 構	方 程 式	相関係数	標準誤差	観測数
東一坊人路 東側溝心	$Y = -0.0051951X - 18800.28$	0.99988	0.153	3
東一坊人路 道路心	$Y = -0.0054517X - 18849.48$	0.99993	0.093	4
東一坊大路 西側溝心	$Y = -0.0057312X + 18902.02$	0.99972	0.154	5
東一坊坊間東小路 東側溝心	$Y = -0.0041437X - 18788.31$	0.99971	0.125	3
東一坊坊間東小路 道路心	$Y = -0.0042848X - 18812.38$	—	—	2
東一坊坊間東小路 西側溝心	$Y = -0.0045526X - 18855.20$	0.99955	0.183	3
三条条間南小路 北側溝心	$(X = -0.0016688Y - 146443.35)$	—	—	2
三条条間南小路 道路心	$(X = -0.0008561Y - 146432.28)$	—	—	2
三条条間南小路 南側溝心	$(X = -0.0012800Y - 146395.78)$	0.87805	1.055	6
三条条間南小路 南側溝心 *	$X = 0.0026722Y - 146372.47$	0.99102	0.276	5

*点33を除いた場合 () は問題を含むもの

東一坊大路 平城宮東南入闘に聞く小子門へ通じる大路である。東西両側溝心・路心ともに直線性がよく、高い相関係数が得られる。平城京の条坊は、半面直角座標系（国土座標系）に対して北で西偏するが、東一坊大路の場合、その偏角は、17° 52''（東側溝心）～19° 42''（西側溝心）である。ここでは、路心の偏角である18° 44''を、条坊計画線の偏角としよう。道路幅については、左京七条一坊の第252次調査で、22.3mというデータを得ている。しかし、西側溝が非常に大きく、溝岸が流水によって侵食されているため、正確な幅は確定しがたい。平城宮小子門の南側で実施した第39次調査で得た23.6mを、本来の側溝心々間距離と考えておく。

この値は、すでに指摘されているように、80尺（以下、たんに尺という場合は、大宝令小尺をさす）と復元するほかはない。しかし、東一坊大路の設定を、和銅六年（713）の度量衡改定以降とみる必要はないと思う。というのは、小子門の遺構の再検討によれば、門の平面は、從来の推定より小さく、桁行總長65尺と確定できる^③。この小子門基壇の両側の溝が、そのまま東一坊大路の両側溝であり、門心と東一坊大路心（条坊計画線）は一致する。平城宮の建築が、小尺を使用したことは疑いないが、東一坊人路の場合は、小子門平面との密接な関連から、設定にあたって小尺を使用した、と考えられるのである。したがって、東一坊人路の設定年代を、ことさら下降させる必要はない。和銅遷都当初からの設定とみてよいであろう。

東一坊坊間東小路 本書所載の第46次調査で東側溝を検出しているほか、路心・両側溝心のデータがある。やはり直線性がよく、高い相関係数が得られる。国土座標系に対する偏角は、東一坊大路よりもやや小さく、14° 15''（東側溝心）～15° 39''（西側溝心）である。路心偏角14° 44''を、条坊計画線の偏角とする。道路幅については、左京三条一坊の第230次調査により、側溝心々間で7.1m、左京六条一坊の奈良市第139次調査では、同じく6.5mの値を得ている。前者は、正しく20大尺（24.0）に相当するが、後者は、大尺・小尺とともに完好な数値とならない。ここでは、平城宮および今回の調査地に近い前者の数値を、本来の道路幅と考えておく。

三条条間南小路 路心・両側溝の検出例がある。原データでは、北側溝心と路心が国土座標系に対して、逆に西で北偏した数値を示す。しかし、資料数の多い南側溝心のデータを検討すると、左京の点28～32がほぼ一直線に並ぶのに対して、右京三条三坊の第162次調査の点33だけが、一つだけ大きく北へずれる。つまり、点28～32と点33は同一直線にはのらず、条坊計画線との位置関係が、両者で異なることは明らかである。これは、Tab.11に示すように、相関係数と標準誤

Tab.12 条坊計画線の方程式の推定

条 坊	方 程 式	備 考
東一坊大路	$Y = -0.0054517 X - 18849.48$	道路心の方程式
東一坊坊間東小路	$Y = -0.0042848 X - 18812.38$	道路心の方程式
二条条間路	$X = 0.0026722 Y - 146235.08$	点22と二条条間南小路の傾きから
二条条間南小路	$X = 0.0026722 Y - 146368.92$	点33を除く南側溝心の式を3.55m北へ

差にも端的に表れている。つまり、点33を含む場合の南側溝心の回帰式は、相関係数が低く、標準誤差も大きい。それに対して、点33を除いた場合は、相関係数が高い数値を示し、標準誤差も格段に縮小する。そこで、点33以外のデータから求めた回帰式を、南側溝心の方程式と定めることする。この直線は、国十座標系に対して、9° 11' 西で南偏する。

道路幅については、左京三条二坊の第174-10次調査により、側溝心々間7.1m、右京三条二坊の第162次調査で、同じく10.1mというデータを得ている。前者は、正しく20大尺(24尺)に相当するが、後者は、大尺と小尺のいずれによっても、完数とはならない。やはり、今回の調査地に近い前者の数値を、本来の道路幅とみておく。そして、南側溝心の北3.55m(10大尺=12尺)の位置に、路心を想定することにしよう。後述するが、この路心は、三条条間路との関係からみて、条坊計画線と一致すると考えてよい。次に、こうして得た路心の方程式に、先述の第162次調査地のY座標を代入すると、そこでの条坊計画線の推定座標は、($X = -146,421.93$, $Y = -19,837.00$)となる。この数値は、点27の路心と6.6mくいちがっており、むしろ点33の南側溝心に近い。したがって、第162次調査の成果に立脚する限り、ここでの三条条間南小路の設定は、条坊計画線を中心としてではなく、北へずらしたかたちで行われたと考えざるをえない。

三条条間路 大半が、現在の通称「大宮通り」の路面下となっており、右京三条二坊で路心と両側溝の検出例があるにとどまる。ここでの道路幅は8.82mと報告されており、25大尺(30尺)と復元することができる。国十座標に対する偏角は、発掘調査からは明らかでない。そこで、二条条間南小路の推定偏角である9° 11'を、便宜上、三条条間路の偏角とすることにしよう。そして、奈良市第236-2次調査で得た路心座標を通る直線を、条坊計画線と想定しておきたい。

なお、この直線を、左京三条一坊十四坪まで延伸し、三条条間南小路の推定条坊計画線との間隔を求めるとき、133.8mという数値を得ることができる。これは、375大尺(450尺)とみて誤りない数値であり、この二本の道路に関する、上記の推定の妥当性を裏づけるものとみられる。

左京三条一坊十四坪の四至 以上の作業から推定した、条坊計画線の方程式を、Tab.12に示す。この四本の直線の交点A～Dが、左京三条一坊十四坪の四至である(Fig.22)。それによると、十四坪の辺長(条坊計画線間)は、北辺(A-C)が133.6m、残りの各辺が133.8mと、ほとんど一致した数値を示す。また別に、各道路の、当該坪側の側溝心の方程式を求め、その交点をa～dとする。それぞれの間隔が、対辺側溝心々間距離であるが、この場合、北辺(a-c)は118.5m、南辺(b-d)が118.7m、東辺(c-d)と西辺(a-b)は125.9mとなる。

(1) 井上和人「古代都城制地割再考」『研究論集VII』奈良国立文化財研究所 1985年、pp. 1-102。

(2) 新井宏『まぼろしの古代尺-高麗尺はなかった-』1992年。

(3) 小沢毅「平城宮小字門の再検討」『奈良国立文化財研究所年報1994』1994年、pp.66-67。

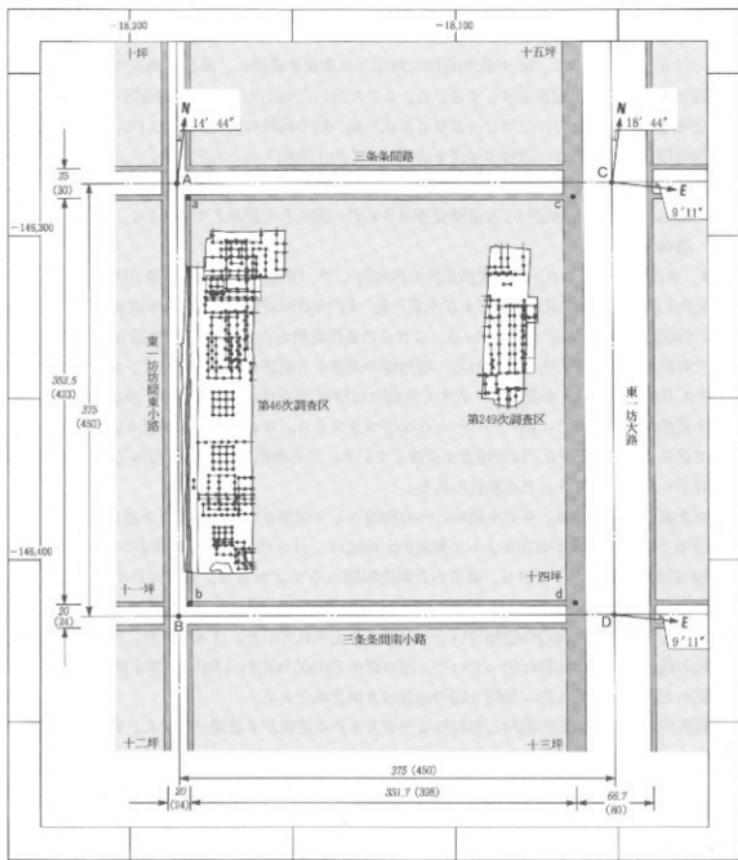


Fig.22 左京三条一坊十四坪周囲の条坊復元 單位尺(斜体は人尺) 1:1500

2 左京三条一坊十四坪の遺構変遷

すでにII-2において、第249次調査区で検出した遺構を概説し、第46次調査で出土した掘立柱建物と掘立柱塀の一覧表を示しておいた。ここでは、このふたつの発掘調査区における主要遺構の変遷を考えてみたい。ただし、おなじ左京三条一坊十四坪の敷地内とはいえ、両地区は、その東西両端の位置にあり、遺構の年代を決定づける出土遺物もほとんどない。したがって、以下に示す遺構変遷は、遺構の重複関係や柱筋のそろいかたなどの、ごく限定されたデータに基づくものである。いくつか想定しうる遺構変遷のうちの一案として提示してみたい。

A 遺構変遷

Ia期 奈良時代のはじめ。第46次調査区の西壁近くで、南北方向の坪境小路 SF100の東路肩部分、軸約1.5mの東側溝 SD385、および左京三条一坊十四坪の西側を区画する南北方向の築地塀 SA201(基底幅約2m)がみつかっている。これらの条坊遺構および敷地区画施設は、奈良時代を通じて存続していたものと考えられる。築地塀の南端から約25m北のところに、桁行1間の棟門 SB250A(柱間寸法7尺)が開き、そのまま北側には暗渠 SD262が東西に通る。SB250Aは1間のみの小規模な棟門であり、裏門の一つとみなすべきだろう。なお、この棟門は十四坪西面の中央付近ではなく、南から約3/10の地点に位置している。この棟門位置の偏りをみると、十四坪と十三坪が一連の敷地であった可能性もある。

第46次調査の結果では、その全域が一つの敷地として利用されていたものと思われるが、奈良時代前半では、東西塀 SA270によって敷地内が南北に二分されていた。南半部では、調査区南端で池 SG210がみつかっており、邸宅内の園池領域とみてよかろう。SG210は中島をともなう曲池であり、発掘区南端からさらに南にひろがっている。SG210はかなり長期にわたり存続したものと考えられるが、周辺の建物はいくどか造りかえされていた。Ia期には、SB205とSB245の2棟の建物が、池の北側に建っていた。池の畔のSB205は桁行4間×梁間2間の東西棟、その北側のSB245は桁行5間×梁間3間の西庇付き南北棟である。

発掘区の北半には、居住施設と思われるやや大きめの建物が2棟建っていた。敷地北端に近いSB370は、桁行6間×梁間2間の身舎に南北2面庇をつけた建物である。ただし、北庇は中央の2間のみとする。南側柱列の西端から3つめまでの柱穴にいずれも柱根(径28~35cm)が残っており、そのうちの1つの柱根は、年輪年代測定によると、伐採年代の上限は680年代を示している。一方、南側のSB300は東西2面庇をもつ桁行5間×梁間4間の南北棟である。

十四坪東端の第249次調査区では、この時期に相当する建築遺構がみつかっていない。発掘区中央東寄りのところに、2間以上の東西塀 SA5669と2間の南北塀 SA5668が建っていたにすぎないから、この区城の性格についてはよくわからない。

Ib期 第46次調査区の園池領域のみ変化する。東西塀 SA270の南側で、SB205は南東のSB204に、SB245は東寄りのSB235に建て替えられるのである。池の畔に建つSB204は、梁間2間以上×桁行1間以上と推定され、床束の痕跡と思われる柱穴が残っており、おそらく床張りの東西棟であったと考えられる。北側のSB235は梁間4間×桁行2間以上、南北2面庇付きの大きな東西棟である。

IIa期 奈良時代前半の中頃。敷地を南北に画していた東西塀 SA270が撤去され、その17.5m南

に新たな区画施設として、東西塀 SA241がもうけられる。SA241の北側には、3間×3間の総柱式高床倉庫 SB260・SB280が2棟建設される。SB260とSB280はまったく同一の規模で、しかも南北方向の柱筋をそろえている。平面は、総長が東西6.4m(柱間寸法7尺等間)×南北7.2m(同8尺等間)で、やや南北に長い。柱掘形は1辺が120~140cmと大きく、さらに、SB280南側柱列の東から2つめの柱穴に直徑55cmの柱根が残っていた(年輪年代測定では659年)。径55cmというスケールは、第46次および第249次調査区で出土した柱根のなかでは最大であり、この倉庫群の重要性を示唆するものといえよう。さらにSB280の北方には、2間×2間の高床倉庫 SB360(柱間寸法7尺等間・正方形平面)も造られていた。SB360も総柱式だが、東側の中央柱を省略している。SB360は8間の南北塀 SA330で東側の領域と區画されており、SA330の北東には、梁間2間×桁行4間の小振りな南北棟 SB361も建っていた。このようにⅡa期においては、東西塀 SA241の北側に3棟の総柱式高床倉庫が集中配置され、それらはSA241のほか、南北塀 SA330によって周辺の領域と区画されていたのである。

一方、南側の園池地区では、東西塀の南下によって、SG210を中心とする園池の領域は、おおはばに狭くなった。また、SA241の建設にともなってSB235は廃絶し、3間×3間の総柱式床張り建物 SB220が建ち、SB204も梁間2間×桁行1間以上の東西棟 SB202に建て替えられた。

東側の第249次調査区では、大型の南北棟が2棟建設される。1棟は発掘区のほぼ中央に位置するSB5631、もう1棟はその南にほぼ柱筋をそろえて建つSB5637である。このうちSB5631は、梁間3間×桁行7間の東庇付き南北棟で、北側の4間を「堂」的な広間、南側3間を3つの「室」に区分する特殊な平面をもつ。しかも、西側の3間の南北塀 SA5635とも柱筋をそろえており、

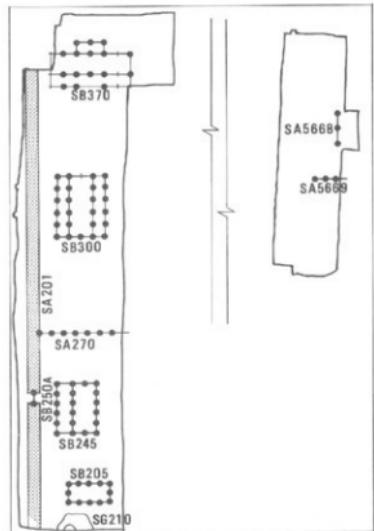


Fig.23 Ⅱa期の遺構

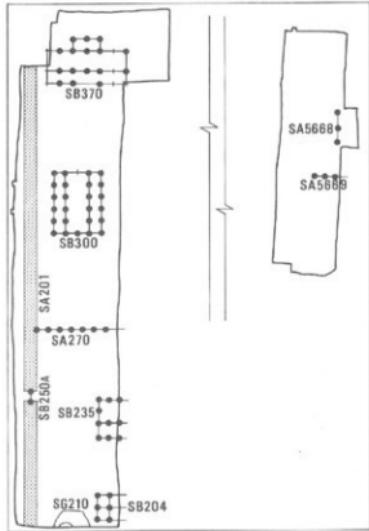


Fig.24 Ⅱb期の遺構

南側3間の「室」部分のみ、西庇をともなった可能性がある。一方、SB5637は北端のみ検出したにすぎず、規模・平面は未確定だが、西庇付きの南北棟である可能性が大きいと思われる。この2棟の南北棟は、東西塀SA5641で北側の領域と画されていた。また、SA5641には南北塀SA5642が接続していた。

II b期 奈良時代前半の終わり頃。II a期から変化するのは、第46次調査区の北半のみである。SB280の北側では、小型の倉庫SB360が取り壊され、居住関係施設と思われる4棟の大型建物が建設される。4棟のうち、規模が確定しているのは南側の2棟で、SB310は梁間3間×桁行6間の東庇付き南北棟、その北側のSB350は梁間3間×桁行7間の南庇付き東西棟である。さらに北側のSB390は、梁間1間以上×桁行6間の東西棟、東端のSB380は梁間2間×桁行1間以上の東西棟である。以上のように、第46次調査地区は、I期からII期にかけて大きく変化をとげる。I期では東西塀SA270によって敷地を南北に二分されていたが、II期になると、区画施設である東西塀が南に移って園池領域がせまくなり、塀の北方に、まず3棟の高床倉庫が配置されるが、最終的には、中央区の双び倉の北方に居住関係施設が建設され、敷地を南・中・北の3地区にわける用途分担がなされるようになる。

ところで、いまのべたように、II b期になると、第46次北区において居住関係施設が充実していくのだが、それらの建物個々の規模は、第249次調査区で出土したSB5631におよばない。SB5631がII期を通じてもっとも大きな建物なのである。したがって、左京三条一坊十四坪全体では、中央部分が未発掘ではあるが、敷地の中枢機能が、どちらかといえば、東寄りにおかれていた可能性が大きかろう。

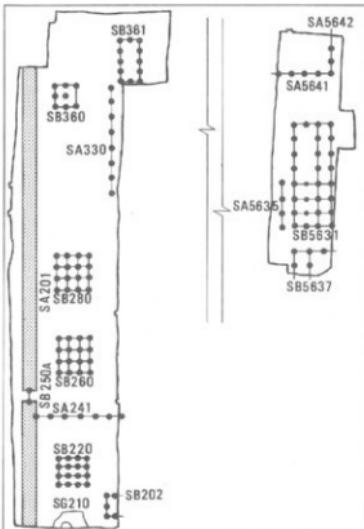


Fig.25 II a期の遺構

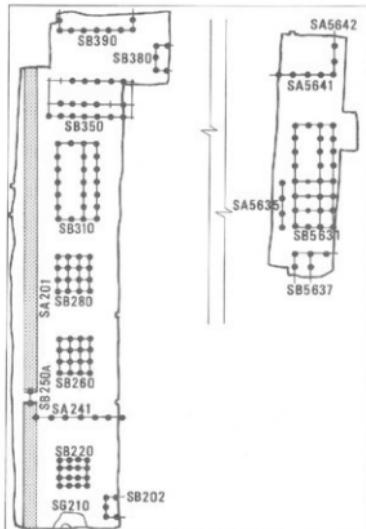


Fig.26 II b期の遺構

Ⅲ期 奈良時代後半。第46次調査区では、恭仁京その他への遷都のあいだも、双び倉SB260・280および池SG210は存続していたものと考えられる。しかし、西面築地塀をぬける棟門が建て替えられる。すなわち、柱間寸法7尺のSB250Aが、同11尺のSB250Bに変わるのである。他の建物・塀はすべて撤去され、還都後、新しい建物が造られた。第249次調査区ではSB5630、SB5632、SB5638、SB5640、SB5663、SB5665の7つの建物がこの時期に属す。このうち、正殿クラスの建物と思われるものがSB5632である。SB5632は南北にならぶ5つの柱穴が発掘区西壁沿いで検出されたにすぎないが、柱根の径は大きく、南北二面底付き東西棟と推定される。SB5632の東側に建つ梁間3間×桁行7間の東庇付き南北棟SB5630とその南側のSB5638が脇殿風の建物である。SB5630の柱抜取り穴からは、奈良時代終わり頃の土器(平城宮土器編年V期)が出土している。Ⅱ期のSB5637の柱穴を覆う土坑SK5660の埋土からは、奈良時代中頃から後半の土器(平城宮土器編年Ⅲ～Ⅳ期)が出土している。また、SB5632の南側に建つ小振りのSB5665は、SB5632の前殿とみなされる。SB5632の北東には、一間門SB5663が建っていた。痕跡は残っていないが、この門の左右にはおそらく低い築地塀が通っていて、敷地を南北に区画していたものと思われる。その北側には、東庇付きの南北棟SB5640をもうけている。

一方、西側の第46次調査区では、Ⅱb期とおなじく、南・中・北の3つの領域に分ける敷地利用がなされていた。ただ、Ⅱb期において南の園池と中央の倉庫群を区画していた東西塀SA241は、少し北側の東西塀SA240に建て替えられている。SA240の南側には、梁間2間×桁行6間の東西棟SB230を置き、池SG210の北東の畔には、梁間2間×桁行2間以上の東西棟SB203を新たに建設している。中央区の双び倉はⅡ期以来の姿をとどめているが、北区では柱筋をそろえ

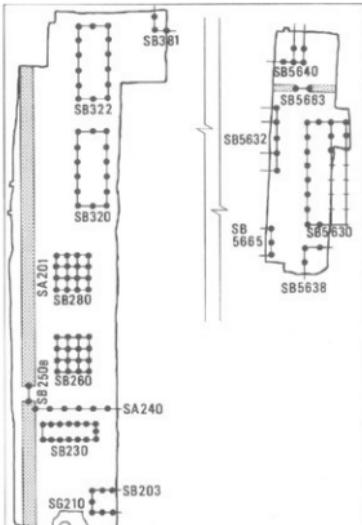


Fig.27 Ⅲ期の遺構

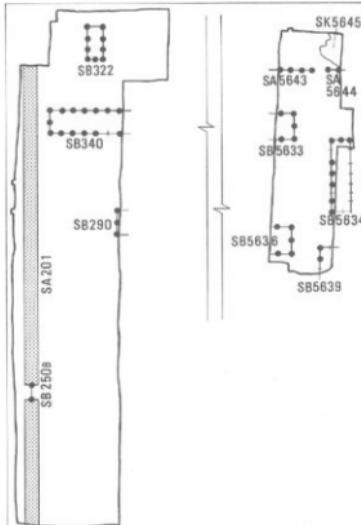


Fig.28 Ⅳ期の遺構

た梁間2間×桁行5間の南北棟(SB320・SB322)が2棟ならび、さらに発掘区北東隅にも1間以上×1間以上の建物SB381が建っていた。

ここでふたたび第46次調査区と第249次調査区の建物規模を比較すると、II期と同じく、東側にあたる第249次調査区のSB5630が、西側の第46次調査区でみつかったどの建物よりも大きいことがわかる。しかも、SB5630は脇殿相当の建物で、正殿と推定されるSB5632は規模が未確定ながら、南北二面底付きのさらに大きな建築であったろう。したがって、III期の場合、中枢施設が十四坪の敷地東寄りにあった可能性は、II期以上に高いといえよう。

IV期 奈良時代末期～平安時代初頭。園池地区および双び倉は廃絶する。ふたたび大きな建て替えが進むが、新たに建設された建物は、いずれも規模が小さくなっている。第249次調査区ではSB5633、SB5634、SB5636の3棟が中庭を囲むかのように配置される。SB5631は、梁間2間以上×桁行7間以上の南北棟、SB5633とSB5636はいずれも梁間2間×桁行1間以上の東西棟である。このような3棟の建物がコ字形にならぶ家屋配置は、III期のSB5630、SB5632、SB5665の配列とも共通しているが、柱穴や平面の規模はIII期のほうがはるかに大きい。たとえば、おなじ桁行7間規模のSB5630(III期)とSB5631(IV期)を比較すると、SB5630は桁行総長が20.7m(柱間寸法10尺等間)で、柱穴の1辺が100～120cmであるのに対し、SB5631は桁行総長が12.5m(柱間寸法6尺等間)、柱穴の1辺が50～70cmである。SB5633、SB5634、SB5636は、その敷地を東西堀SA5643およびSA5644で北側と両されている。SA5643とSA5644は柱筋を一致させており、この間を出入口とした可能性が大きい。SA5643とSA5644の北側には、金属鋳造関係の廃棄物を捨てた土坑SK5645があり、この一帯、もしくはその周辺に工房が存在していたことを示唆している。少なくとも、III期までの住宅地的な造構のありかたとはかなり異質な敷地の性格が看取できよう。なお、発掘区南東隅のSB5639もこの時期の建物と推定されるが、IV期の他の建物とくらべると、柱穴の規模は1辺80～100cmと、いくぶん大きくなっている。ただし、平面の全体規模は確定していない。

一方、西側の第46次調査区では、北区にSB290、SB322、SB340の3棟が建つ。もっとも北側のSB322は梁間2間×桁行3間の小振りな南北棟、中央のSB340は梁間2間×桁行6間以上の東西棟である。IH倉庫群地区に近いSB290は、発掘区東壁に3つの柱穴を検出したのみで、平面規模は不確定だが、梁間2間の東西棟と推定される。

IV期とみなされる造構のうち、平面規模のもっとも大きな建物は、西側の第46次調査区で出土したSB340である。III期までの最大規模の建物は、いずれも東側の第249次調査区で出土した造構であったから、十四坪における中枢的施設の位置も、IV期になって大きく変化した可能性があるといえよう。なお、第46次調査区で出土した坪境小路近くの二、三の土坑を除くと、平安時代以降の造物を出土する造構はない。したがって、左京三条一坊十四坪の敷地は、長岡京遷都後、比較的早い時期に廃絶したものと考えられる。

B 敷地利用の特徴

以上の変遷を、敷地利用という観点から整理しなおしておきたい。

まず、奈良時代のはじめ(I期)では、東側の第249次調査区にはほとんど造構が認められないが、西側の第46次調査区では、東西堀SA270を境にして、北半を居住地区、南半を園池地区にわけていた。奈良時代前半の中頃(IIa期)になると、第249次調査区に大型の脇殿風の建物が建てられ、

十四坪の敷地における中枢的な機能は東寄りにおかれていた可能性がある。一方、西側の第249次調査区では、東西塙 SA270が撤去され園池地区は狭くなり、東西塙 SA241の北側に2棟の大型倉庫 SB260・SB280と1棟の小型倉庫 SB360が建設される。ところが奈良時代前半の終わり頃(IIb期)には、双び倉の北側がふたたび居住領域となり、比較的大きい建物が数棟新築されるのである。第46次調査区における敷地利用のパターンを、ここまで再トレースすると、

I 期：南=園池 北=居住施設

IIa期：南=園池 北=倉庫群

IIb期：南=園池 中央=倉庫群 北=居住施設

というプロセスを確認できる。

奈良時代後半のIII期にはいると、再度大きな建て替えがおこなわれるものの、敷地利用のパターンは、IIb期のスタイルをそのまま継承している。すなわち、十四坪の中心的機能は東寄りにあり、西側では「南=園池／中央=倉庫群／北=居住施設」という用途分担が認められるのである。ところが、奈良時代の終わり頃(IV期)になると、敷地の様相が一変する。まず第一に指摘すべき重要な変化は、それまで中心的施設のあった東側の第249次調査区に大型の建物がみられなくなり、東寄りの地区は、むしろ金属鋳造の工房として機能していた可能性が大きいことだろう。一方、西側の第46次調査区では、双び倉や園池がいつまで存続したのか不明だが、北半には規模の小さな建物が3棟建っていたにすぎない。以上のように、III期からIV期にいたる十四坪の敷地利用変化は、建物の小型化に象徴されるように、まず「衰退」の傾向を強く印象づけるが、それ以上に、用途そのものの転換を示唆するものもある。それは、I期からIII期までの敷地利用変遷が、一定の宅地内部での建て替えを反映するようにみえるのとは対照的であるといえよう。

3 結 語

調査地のある左京三条一坊は、北に二条大路、西に朱雀大路、東に東一坊大路、中央に東一坊坊間路が南北に通り、平城宮壬生門の正面に位置する。宮外官衛と考えられる遺構も検出されており、長扉主邸をはじめとする、貴族の宅地である左京三条二坊等とは、少し性格を異にする部分もあるようである。今回の調査は、平安京では、十四坪が神泉苑の一部であり、加えて、第46次調査で園池等が検出されていることもあって、その性格解明の手懸かりが得られるのではないかと期待された。

25年以上の間隔をおいて実施した第46次・249次調査は、それぞれ坪の西辺部と東北部の一画、面積にしてあわせて約3,000m²、坪全体からみれば、わずか20%強を調査したにすぎない。なおかつ、坪の中央部分ではなく、縁辺部の調査である。しかしながら、かなり遺構の密度の高い状況を窺うことができ、近接した坪の調査例と比較しても、ここが1町占地、さらには、第46次調査の坪西面築地に聞く門の位置や園池の存在から、両の十三坪も合わせた2町占地の貴族の邸宅であった可能性も考えられる。

2次にわたる調査の成果としては、十四坪の西面築地とそれに聞く棟門、掘立柱塀13条、総柱式高床倉庫を含む掘立柱建物37棟のほか、園池等を検出し、宅地利用状況の一端が明らかになったことと、土器埋納遺構から、ヒトの胎盤と銅刀子・墨挺・筆管を納めた胞衣壺が出上したことがあげられる。

遺構は、奈良時代では、大きく4時期の変遷をたどる。坪西辺地区では、初め掘立柱塀で敷地を園池と居住施設に区画し、II期になって、倉庫群の一画がこれに加わる。特に、南北に並ぶ2棟の総柱式高床倉庫が、この地区的性格を考える上で手懸かりになるといえるであろう。これに対し、坪東北地区では、奈良時代当初は、遺構が希薄であるが、II期になると、敷地を辦で区画し、その中に大型の掘立柱建物が出現する。こうした状況は、平城遷都後の奈良時代後半(Ⅲ期)になってしまっている。すなわち、恭仁宮への遷都をはさんだ前後の時期で、建て替えがあるとはいいうものの、坪内における敷地利用形態が大きく変化することなく、基本的には、II期の用途分担が踏襲されているのである。また、発掘調査を実施した限られた範囲ではあるが、II・III期における、十四坪の中枢機能は、建物規模等からみて、東寄りにあった可能性が考えられよう。なお、坪東北地区において、III期には、正殿・脇殿・前殿といった建物配備が想定されるが、これは、II期の建物群を少し東に移したものとみることもできるであろう。奈良時代末には、敷地利用形態が大きく変化する。建物が小型化するとともに、鉢津・堆塙・礪羽口等を投棄した土坑の存在から、敷地の一画に、金属鋳造関係の施設があったと考えられる。

土器埋納遺構は、2棟の南北棟SB5630・SB5638のちょうど中間に位置している。ただ、胞衣壺の身として用いられた須恵器壺が奈良時代前半のものであるのに対し、建物は奈良時代後半に建てられたものである。したがって、胞衣壺と2棟の建物の間に何らかの関係があるのか、あるいは偶然の結果なのかは、早急に結論を下すことはできない。

今回の調査においても、坪の性格を知りうるような直接的な資料は得られなかった。今後、未調査である坪の中心部分のみならず、周辺地区を含めた発掘調査が進めば、その性格が明らかになってくるであろう。

図 版

P.L.1 第249次調査



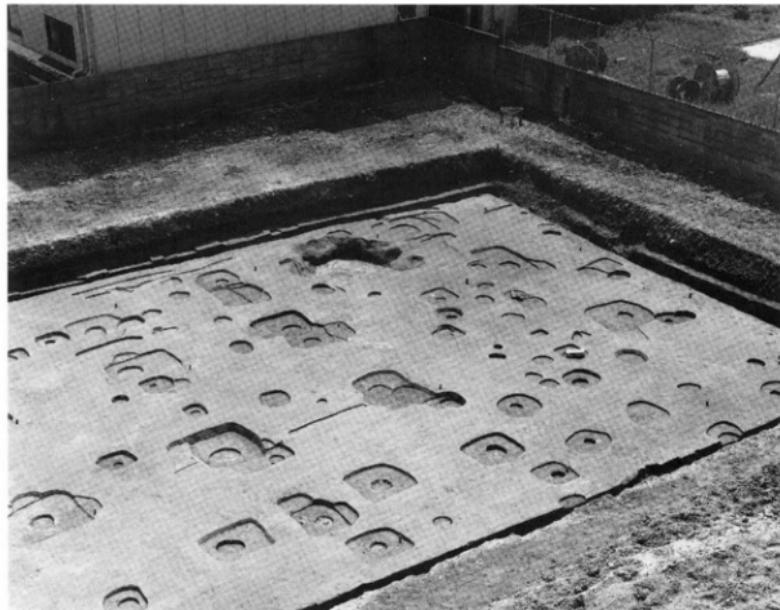
1. 発掘区全景
北から



2. 発掘区中央
西から



1. 発掘区北端
南西から



2. 発掘区南端
北西から



1. 掘立柱建物

SB5631

北から



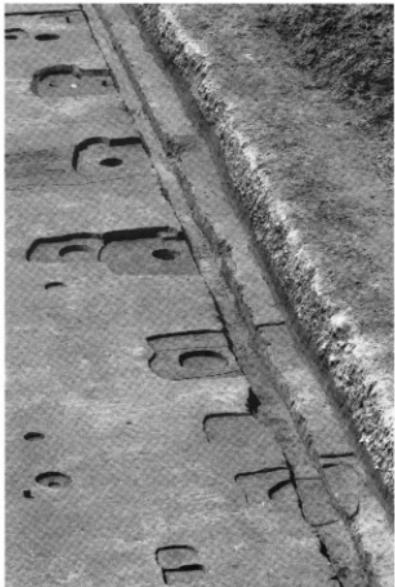
2. 掘立柱建物

SB5640 •

掘立柱堀

SA5641

北から



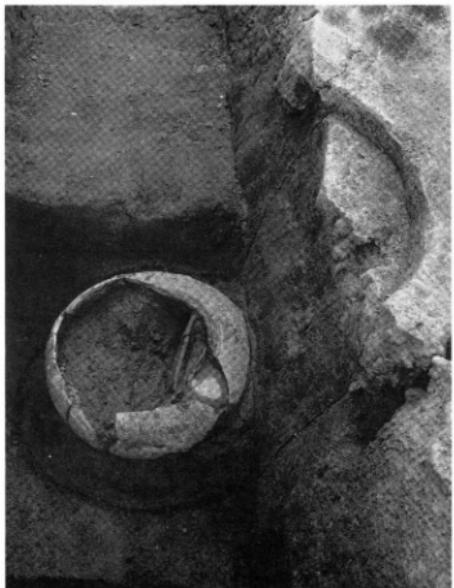
1. 挖立柱建物SB5632 北から



2. 南拡張区 北東から



3. 東拡張区
北から



1. 土器埋納遺構SX5670 北から



2. 挖立柱建物SB5630柱抜取り穴土篩器出土状況 北西から



3. 挖立柱建物SB5630北妻の柱根 南東から



4. 挖立柱建物SB5632東妻の柱根と礎板 東から



6091 A

6091 B



6091 A(1)



6091 A(2)

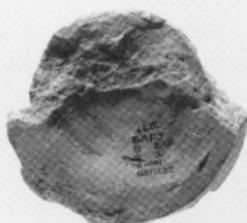
上-1:2 下2点-1:3



6225 C



6227 D



6308 I

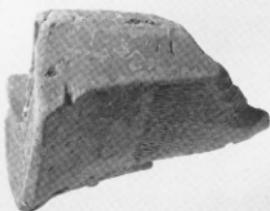


6284 E b

6304 B



6691 B(1)



6691 B(2)



6691 B(3)



6691 B(4)



6644 C



6775 C

6801 A



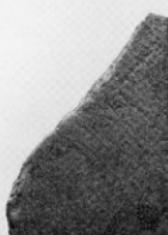
1

2



3

4



5



6



1~11-2:5 21~25-1:2

P L.11 金属製品・土製品等



9-2:3 13-1:3 他は1:1



1. 発掘区北半
南から



2. 発掘区南半
南から



1. 発掘区北端
南東から



2. 門SB250・
築地堀
SA201
南西から



1. 縱柱高床倉庫
SB260 西から



2. 池SG210
北西から

平城京左京三条一坊十四坪発掘調査報告

1995年3月25日 印刷

1995年3月31日 発行

編集発行 奈良国立文化財研究所
奈良市三条町2丁目9番1号

印 刷 明 新 印 刷 株 式 会 社
奈良市南京終町3丁目464番地

第46・249次発掘調査遺構平面図 1 : 200

X Y
A -146,283.68 -18,185.58

第46・249次発掘調査遺構平面図 1:200

-146,283.32 -18,051.99 C

